
Willenscraft **ウィレンスクラフト**

愉式 瞬戯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Willenscraft ウィレンスクラフト

【Nコード】

N6756W

【作者名】

愉式 瞬戯

【あらすじ】

祭典前日のガーネット王国で、少年アモル・ウィレンスは不思議な少女と出会った。それから運命の歯車が回り出す。

登場人物

ガーネット王国

王室 ロイヤル

王族

故王 オーラム・ガーネット aurum garnet

故妃 グレイシア・ガーネット gracia garnet

王女 グローリフィア・ガーネット gloria garnet

et

皇族

女騎士 ロサ・アズール rosa azur

王女の側近 ヴイオラ・カルマート viola calmato

侍女 フランソワーズ・デ・ラ・フェルメ francoise

de la ferme

マーガリート・アントワン marguerite an

toine

騎士団 フォルティス

団長 スターク・ウォルター stark walter

総括班長 フリード・イーディング fried easingg

部隊班長 ヘリオ・フレツチャー herio fretcher

騎士団員 ルドルフ・ゲイズ rudolf gaze

新入り アモル・ウイレンス amor willens

ステファン セリオ steppan serio

ロックス・ハード rocks hard

ウェル・トレイ well trey

ゲージ・ミドサム gage midsome

モツソ・レフト mossos left

ネルニク・ジャステイツ nellnik just

ish

一般・城下

鍛冶屋 グレアム graham

アモルの母 エマリア emalia

姉 ミランダ miranda

西の森 獣の森

獣族

ユニコーンの馬獣 ホーナー hornar

黒毛魔牛 フォルケンブルク vorkenburg

赤毛魔牛 バルクンティツヒ balkendich

森のアイドル ミニリッチ minirich

不思議な少女 チャステイ chasty

友人の家を訪問した帰り。祭典の前日ということもあり、お祭り気分が高まる城下街を通り抜け、帰宅する途中だった。

先日、度重なる失敗のため、ピザ屋を辞めるはめになり意気消沈している。

少年は夕日が沈みゆく帰路をとぼとぼと歩いている。

160センチぐらいのコンパクトな身体に、まだあどけない顔立ち。

くるりとホイップクリームのようにまとまっているダークブラウンの髪、薄い茶の襟付き長袖シャツと濃い茶のズボンを赤茶のレザールベルトで締め、靴はこげ茶の踝が隠れるぐらいの短いブーツという、全体的に茶色い質素な様相をしている。

少年は不安な目で遠くを見ながら、歩を進める。

時折、込み上げてくる明日への不安が一層疲れきった身体を重く感じさせ、歩みを止めようとするやと打ち寄せてくる悲しみに飲み込まれそうになる。このままずっと深い闇の中に

そんな昼と夜が入れ替わろうとしている時だった。

「待てーッ！」

遠くから兵士の声が聞こえてきて、ビクリとした。

んっ？

微かにざわつく胸は何か起きたのかと心配している。

「侵入者だーッ！」

続け様に喚起は静まり返った辺りに響く。

んっ？

急に夕闇に紛れて、黒い影が視界を横切った。段々と兵士の声が近くなってくる。

「くそっどこに行ったんだ？」

兵士は周囲を見渡し、こちらを向いて、すぐに駆け寄ってきた。

「その少年ツ！もうすぐ夜になるので 早く家に帰りたまえ」
兵士は少し残念そうにしながらも己の責務を務めようとしている。
「はい」

少年は不平混じりの笑みを浮かべて頷き、

「分かってるよ そんなこと」

小さく呟いて、また歩き出す。

(あゝあ、全く何だっけって言うんだよ)

行き所のない苛立ちをぶつける場所もなくなただ嘆いていると、

「ねえ」

突然、どこからともなく現れた問いかけが耳に入ってきた。

「あれ？」

自分以外に誰もいないはずの状況を疑問に思い、きよんとしたような顔をする。

「ねえー」

今度は先ほどよりも輪郭がはっきりと整って聞こえた。

まただ

一体どこから聞こえてくるのだろうかと思ひ、その問いかけの正体を突き止めようと振り返ってみることにした。

よしっ

強張った身体のを抜き、心の準備を整え、勢いよく後ろを向いた……が、

あれっ???

そこには誰もいないで、変わらない風景が続いているだけだった。奇妙に思いながらも、あきらめて帰ろうとゆっくりと身体を元に戻した。その時、

「うわっ？」

ちよつと自分の背丈と同じぐらいの物体が目の前に映り、驚きの余り荒立ててしまった。

いきなり何なんだ!?

後退りし混乱している、

「あの〜」

躊躇い混じりの透き通った微笑みがサラリと頬を擦れ、訊ねた。

んっ

重なり合う残像を束ねて、なんとか瞳に捉えようと見開いてみる。目を凝らしてまじまじと見つめると、薄暗くて分かりづらいが、どうやら人のようだ。はつきりと見えないので、その姿を確かめようとしばらく見入ってみた。

そこだけ時間が止まったように動かないまま少しの沈黙が続く。程なくしてその人は、はあ、と小さなため息を零して、あつちの方へとゆっくりと歩き始めた。離れていく後ろ姿はどこか残念そうで、瞬きをする度にまた一步、また一步と遠退いていく。

「っ……」

少年はただ立ち尽くして見ているだけだった。しかし何か引つ掛かる。胸の中で密かに重い歪な塊が渦巻いている。この取り留めもない罪悪感にも似たような感じは何なのか。思い当たる理由はないかと目を閉じて自問している内に、その人は夕闇に紛れて消え行くこうとしていた。

このままじゃいけないと駆り立てる想いは、咄嗟に今までのシーンを思い返させ、少年に一つの答えを導かせる。

きらり、と少年の脳裏に一筋の光が閃き、辿り着いた思考に突き動かさるように駆け出し、そのままその人の許まで走っていく。

両腕を交互に振りながら、ふと頭の中に問答が過る。

単純だった きつと困っていたんだ なら力にならなきゃ

息を枯らしながら全力で腕を振り、気づけばもうその人のすぐ側まで来ていた。

すぐ手前で勢いよく回転していた足を踏み留ませて、膝を折り、直立した後に勇気を振り絞って、立ち去ろうしている相手に呼びかけてみる。

「ちよ、ちよっとー!」

一刹那の風が通り過ぎた後に、先方は「んっ」と首を傾げ、ゆるりとこちらを顧みた。

「えっ、っ」と

いざ対面してみると、不意にも少年は言葉に詰まらしてしまった。次いで、視線が地面の方に落ちてしまったが、スーッと空気を大きく吸い込み、立て直してもう一度試みる。

「どうかしたのですか？」

変な使命感が邪魔をし、力んで、ぎこちなくなってしまうた。

「ええっ」と

一息の間を置いて、細い声で返答が来た。声色は高く、また濁りのない響きは紛れもなく女の人のものだ。

「あの、道に迷ったの」

女の人は心細く話した。

少年は瞳を瞬かせ、先方を見つめ直して透かさず、率直に受け止める。

「はい」

ピントが整い、徐々にその姿が露になっていく。陰って見づらくはあるが、大よそ同じ位の年恰好に思える。小さな顔につぶらな瞳をして、左右の肩に毛先が付くぐらいの髪。何となく光沢のような艶が見える。暗いから分かりづらいがおそらく金色か茶色、その中間ぐらいだろう。

見慣れない服装だなあ

身に着けているのは、胸と腰に巻かれている薄っぺらいベージュ色の布。足元には、甲の部分から踝にかけて網状の細い皮が巻き付けられている靴底の平らなサンダル。

少女は何も答えないで、じっとしている。しばらく返事が返って来なかったもので、こちらから訊ねてみた。

「どちらまで？」

「んっ？」

少女の気の抜けた相槌に拍子抜けして、思い掛けず噤んでしまっ

た。

呆然としている少年を余所に、少女はあちらこちらを右往左往し始めて、「ん〜」と時折呻きながら、頻りに何かを探している。

少年は折れそうになつたが心を起こして、めげずに話しかける。

「探し物？」

「見つからないの」

引き続き動き回りながらも少女は答えた。

見渡してみても何もなく、砂利道の両端に草木が生えているだけ。

一体何を探しているんだろう　と少年が嘆息しようとした……。

とっ！そつ、その時？「あつ、こつちだ」と言い、途端にヒラリと踵を返して、一方向を目指して、少女は走り出した。

(えっ)

突然のこと過ぎて、ものも言えずに軽く嘆く。先程は立ち尽くしていた少年は早くもその奇抜ぶりに耐性(たいせい)が付き、仕方なくも彼女の後を追いかけることにした。

自分が来た道を戻り、方向を変え、少女は道を外れて脇路へと逸れていく。

速いっ

力仕事などをしていたこともあつて自分でも足腰には自信があつたはずだったが、その思い込みは簡単に崩れる。目一杯力を振り絞つても、距離を縮めることができない程の俊足。

行き詰る度に足を止めて、その方向を確認する少女に息を切るらしながら、なんとか追いついた。

疲れと安堵が混ざり合っていて苦しくもあつたが、背中越しに喉を絞り、優しく声を掛けてみた。

「見つかったの？」

「うん」

穏やかに吹く風に右手を晒し、靡かせながら少女は頷いて打ち明ける。

「急に無くなつたから、ビックリしちゃった」

安心したみたいなのか少女は思うままに話し出した。

「いつもは同じ匂いがするのに変なんだ」

「匂い？」

疑問に思ったので、つい声に出してしまった。

「うん そう」

少女は軽々と言っただけ。

発せられる言葉の節々はどこか幼くも聞こえる。考え出すと謎が深まるばかりであるが、さらに話は続く。

「それでね」

少女は再び、歩みを始めた。

「うん」

宛がうように相槌をし、少年は肩を並べるように少女の隣に着く。

「今日は変な感じがしておかしいの」

「変な感じ？」

「うん」

こくりと首を縦に振ってから、少女は左の手を開き、手の平を空に向け、右手は握りこぶしにして、小さな円を描くように回すというジェスチャーをしながら説明する。

「重くて黒いやつがあ　こつ　ぐるぐるしてるの」

「それで？」

よく分からなかったなので、その先を訊いてみた。

「だから　ぐるぐる回っているの」

少女は不満げに訴える。

怒らしてしまったみたいだ

ここは穩便おんびんに事を進めようと短いながらも、少年は相手の挙動から次の最善の一手を模索する。

う　ん、と首を捻ひねって、考える思索顔。

まだかまだかと度々、少女が横目でこちらを窺うかがってくる間に暫しばしの無言の時間が過ぎた。

「わかった」

これ以上沈黙が続くと危ういと思ったので早急に述べることにした。

「えっ」

撥るような笑みは、嬉しそうに返答を心待ちしている。

「明日祭典があるからだ」

少女が言っていることの的を射てないかもしれないが、取り敢えず思い浮かんだことを口にしてみた。

「祭典？」

「すぐさまに少女は訊ねた。」

「そうだよ」

無頓着な口は、何の躊躇もせずに言ってみせる。

「祭りなんだ」

へえ、と声を漏らすも少女は黙り込んでいたので、説明してみた。

ふん、と言いたそうな表情で少女はちらりとこちらを流し見していたので、遅れて、語尾を付け足した。

「この国の」

「そうなんだ」

気落ちしたみたいなのか、少女は元氣なく合わせてきた。

つまらなかつたのかあ

少年は胸中で巡らせ、

「それでいっぱい人が集まってすごいんだよ」

盛り上げてみるが、少女は俄かに顔を硬直させて「うん」と頷くだけだった。

あれっ

見当違いの反応に、少年は会話の行先を見失ってしまった。

動揺したのか、取り囲む景色は一変したように思え、月明りに照らされて鈍く光を放つ草花がゆらゆらと揺れて幻想的に魅せ、さっきまでとはどこか違う所に迷い込んでしまったみたいだ。

会話が尽きたみたいだったので、そこからゆっくり歩いて、

3程言葉を交わした後に「ありがとう」と少女は一言残して夜の闇の中に紛れていった。もちろん僕は何か気の利く言葉を返そうとした。でも一度、話が途切れてしまっただけからはギクシャクしてしまっただけで言っているのか分からなかった。

その後、家に帰るまでずっと考えていたけど、考えている内にと
うとう家まで着いてしまった。

ガチャ ドアノブに手を掛けて、木扉を開く。

「ただいま」

発せられた声は屋内の壁にぶつかり合って、寂しく反響した。

って、誰もいないかあ

空しさに煽られ、視線を落としてしまったが、ぐっと顔を上げて、
正面に目をやるとテーブルの上には木編みのバスケットに白い綿布
で覆われていた。

姉さん 帰って来てたのかあ

コト、コト、コトと靴底が木床をつつき、音を立て、テーブルへ
と寄っていく。

近づくと、木面のの上に置手紙が在ったので早速読んでみた。

“パンが余ったので、良かったら食べてください ミランダ”と
綴つてある。

パンかあ

手紙からバスケットに視線を移すと、網目から薄つすらと茶色い
ものが透けて見える。

白い綿布を捲ると、小麦後の芳ばしい香りがふわりと広がった。

おいしそうだ

お腹も減っていたせいもあるのか、普段よりもより一層輝いて見
えた。

姉さんは一年前に幼馴染のパン屋に嫁いだばかりで、たまに気を
利かせてパンを持ってきてくれる。

どれどれ

まじまじと見てみると、掌位の大きさをしている食べやすそうだ。
それにしても良い匂いがする。さっきまでのモヤモヤしていた蟠り

が一気に吹き飛んだ。姉さんに感謝だ。

思い立ったのか、少年は陽気に鼻唄を歌いながら、調理場へと軽い足取りで向かっていく。

食事場のすぐ横に隣接する調理場には、焜炉こんろと流し台が備え付けられている。

調理場の方に行くと、焜炉の上になにやら見慣れぬ鍋が置いてある。

もしや

期待に胸が躍り、高鳴る気持ちのままに歩み寄る。

蓋ふたを開けると、緑や黄色の野菜が白いスープの中で心地よく浸かっている。

ポタージュだあ

嬉しさに、ぐっと胸を打たれる。

姉さんは自慢じゃないが料理が上手い。手先が器用なのでシビツク ガーネット王国の一般国民が通う学校 中でも優秀だったらしい。

あっ！

(思い出した)

一つだけ欠点が挙げるとすると、それはいたずら好きな所である。面白いことに目がない姉ねえさんは幼い頃いつも僕をからかっては楽しんでた。

(懐かしいなあ)

姉さんの作ったポタージュの香りは儂はかなくも温かい幼き記憶よみがえを甦よみがえらせる。

ふーっ、と息を吐いてから水道の蛇口ひねを捻ひねって、手を洗い、焜炉に火を点けて鍋を温める。

ぐつぐつと鍋が煮え始めると、食器棚から木製のスープ皿を取って中にスープを注ぎ込む。

さてと

食事場に戻って木椅子に腰を据え、姉から貰ったパンを木製の小

皿に乗せる。

「いただきます」

手を合わせてから、待ちに待った食事を迎える。
早速スプーンでスープを掬い、口に入れる。

うまい！

(やっぱり姉さんのスープは最高だ)

少年が感涙のひと時に浸っていると木扉が開き、母が帰宅してきた。

「ただいま」

低く擦れた声が少年の耳に届き、ちよつど引きちぎったパンを口に含もうとしていた手を止めて快く迎える。

「おかえり 母さん」

母は見るからに疲労困憊という体相で、目の下には薄っすらと隈ができている。疲れた目でテーブルの上のパンを見てすぐに言った。

「ミランダ 帰ってたのね」

母は小さく零すと調理場に手を洗いに行った。

いつも 大変だなあ

少年は疲れた母を目の当たりにし、そんなことを思いながら残りの食事を平らげた。

母は調理場でまだ古温いスープを温め、お皿に注ぎ、丁度息子が食事を終えるのと同時に食事場に来て向かいの椅子に腰掛けた。

少年は手を合わせ、食事に有りつけたことに感謝をし、お皿を持って立ち上がる。

「ごちそうさまでした」

「アモル ちよつと」

席を立つ息子に母は語りかけた。

「何？ 母さん」

少年はお皿を手にしたまま静止し、調理場を向いていた首を捻い、答えた。

母はバスケットの中のパンを小皿に取り分けながら、息子に訊い

た。

「明日 祭典に行くの？」

「もちろん 母さんは？」

息子は平然と答え、訊き返す。

「母さんは食堂の方を手伝わなくちゃいけないから、行けそうにな
いわ」

母は肩を落とし、嘆息しながら言った。

「そうかあ」

息子は母の身を案じるように頷いた。

母は食事の準備ができたみたいで、卓上にあるパンとスープのど
ちらから食べようか迷っていたが、空腹のためその決断は速かった。
「それで 見つかったの？」

パンを手に取り、小さく千切りながら母は話を続けた。

「うん 一応」

息子は一息置き、素直に打ち明ける。

「明日 ルドルフに会うんだ」

「そう うまくいくといいわね」

食事に夢中になっている母は一旦手を止めてから優しく告げた。

「うん ありがとう」と言っ

嬉しいが少々照れ臭くなりながらも、少年は食器を片づけに調理
場の方へと向かった。

シャワーを終え、浴室から自分の部屋のある二階へと階段をてく
てくと上っていく。

二階には部屋が3つある。右手に僕の部屋、左手に姉さんの部屋、
奥には父さんと母さんの部屋。

その中から一番手前にある自室のドアを開け、部屋に入る。

六畳の板間にベットと机と洋服ダンスが置かれたシンプルな内装。
入室して真っ先に目に入ったのは窓の外にちらりと見える光の粒。
近付いて外を見やると、夜空には星たちが所狭ところましと埋め尽くされ

ている。

明日良いことあるかもなあ

満点の星空を眺めていると、不思議とそんな気がした。

よつと 窓を開け、縁に腰を掛け、夜風に当たってみる。

気持ちい

昼間は太陽が燦々（さんさん）と大地を照らしているので熱いが、夜になるとひんやりとした風が山を下り、木々の隙間から流れて冷風を運んできてくれる。

この国の隣には大きな森がある。緑がどこまでも続いて、景色を一色に染める程の。獣が住んでいるって言われているから近付いやいけない。

本当に獣なんているのかなあ

そよそよと風に揺られながら、ふと思いが巡った。

そしてそのまま火照った身体が冷めるまで、しばらくただぼんやりと夜空を眺めていると、うとうとと眠気が誘ってきた。

寝るかあ

縁から降りてベッドに横たわる。

天井には茶色い木目が模様のように描かれていて、まるで何かのアートみたいにも見える。

目を瞑ると胸を膨らませる期待をちよつとばかりの緊張が窄ませるときどき、そわそわして不思議な気分だ。

次に目を開けた時にはどんな一日が待っているのだろうか。薄れていく意識の中、朦朧と最後に想いを馳せながら、あどけない寝顔でそつと眠りに落ち、夢の中へと入り込んでいった。

すやすやと寝息を立てる少年は気持ち良さそうに眠っている。だが、ちよつど時計の針が12時を指したくらいに突如、少年の呼吸は乱れ始める。

ん

ん

苦しそうに寝返りを打つ。額には薄っすらと汗が浮かんでいる。

う

うん

頻りに呻きながら、腕で額を拭うように擦る。

魔されながら、少年は夢の中で誰かと話でもしているように言葉を漏らしている。

不可思議な状態が小一時間程続いたが、次第に治まり、落ち着いて、また深い眠りへと就いていった。

朝の陽光が窓から滑り込んでいくと共に小鳥の囀りが聞こえ出すと、^{まぶた}瞼の裏側が黒から白へと反転していく。やがて目を開けた少年は寝ぼけ眼で室内を見回し、初々しさで満たされた空間に包まれながら新しい一日を迎えた。

朝だあ

ベッドから起き、立ち上がって、
んーっ、と大きく伸びをして、身体を軽く解してから一階に下りて行った。

「あらっ おはよう」

母は身支度を拵えて、外出しようとするところだった。

「おはよー」

まだ完全には眠気の取れていない少年はすでに準備が整ったであろう母を一瞥してから顔を洗いに行った。

「朝ご飯 テーブルの上にあるから 冷めないうちに食べなさい」
顔を洗っていると玄関の方から聞こえてきたのですぐにタオルで顔面の水滴を拭き取り、

「はーいっ」

元氣よく返事をした。

母さん 早いなあ

内心驚きつつ感慨に耽っている

「それじゃあ 行ってきます」

扉の開く音がし、早々と母が出ていくのに遅れつつも
「行ってらっしゃい」と見送った。

顔を洗い終えた少年は食事場に来るや否や、テーブルの上に置かれた食器に気付き、朝食に取り掛かった。

食しているのは野菜と米と一緒に炊いた粥のようなもの。作っ
てからそんなに経っていないのか、注がれている容器は未だ熱を持っ

ている。

ぱくぱくと勢いよくスプーンで口に入れていく。

おいしかった

空腹を満たすように一気に食べきり、ふうーっと一息を吐く。

食後の暇をいとまやんわりと漂っていると、引き棚だなの上に置かれた写真に目が行った。

あれから十年かあ

写真には、家族四人が並んで仲良く笑っている。

右上に、姉さんの後ろに立ってそつと娘を支えている父さん……、今はもう居ない。

僕が生まれるか、その前ぐらいから続いていた世界混乱。その渦中にいた父さんは、あの森で起きた事件に巻き込まれて命を落とした。僕はその頃小さかったからよく覚えていないが、何か大切なものを失くしたようなあの感覚は今もこの胸に残っている。

左上に白い絹布けんぷで包まれた赤ん坊を抱いて、幸せそうな表情で隣の父に寄り添っているのは、母さん。当時、父さんの訃報ふほうを知らされ悲しみに暮れていた母さんは今ではそんな素振りも見せず、今日も朝早くから街の食堂の方に向かって行った。

右下に元気いっぱいでニコリと笑みを作っているのは、姉さん。相変わらずだ。

写真の中で変わらないままの過去　僕は何か変わったんだろうかあ。年月を重ねる度に大人になっていくけれど、このままでいいんだろうかあ。

昨日、母さんは父さんと同じ道を行こうとしている僕を止めようとはしなかった。

僕には知りたいことがたくさんある。どうして父さんが亡くなったのか、僕は将来どうなるのか。少なくとも、今のままじゃ嫌だけれど。できれば、スタークみたいに皆から英雄と呼ばれるような人になりたいと思っている。

よおしっ！　少年は自分に活を入れて、空からになった食器を持って、

席を立つた。

自室に戻り、着替えを済まし、ベッドを整えていると、布団がいつも以上にぐちゃぐちゃしている。その乱れ具合からまだ記憶に新しい昨夜の夢を思い出した。

昨日のあれ 何だったんだろう

少年の脳裏に夢の中の風景が浮かぶ。

急に空が真っ黒い闇に覆われ、そこに銀色の矢が切り裂くように走り、大地に突き刺さる。瞬時に衝撃波が遙か地平線上から胸元まで到達して、頭の中まで真っ白になるくらいの光に包まれる。

寂しくなった空間を直歩ひたしていると、どこか遠くの辺境より声がある。はつきりと聞き取れないが、何かを伝えようと求めている。僕は声のした方角に走るが、いつまで経っても追いつくことができず、そこで夢は終わった。

一体、夢の中の彼は何が言いたかったのだろう。窓の外の晴天のように冴え渡った頭を全力で回転させて考えても、からつきし分からない。そればかりか、力み過ぎたために頭痛を覚える始末。夢の中の出来事なんだから仕様がな。此処こことは別次元の現象なのだから……。

そうだった

思い当たるものが一つある。追いかけても追いつけないと言えば、昨日の少女の足はとてつもなく疾はやかった。

なんて、知る由よしもないことに気を取られている間にも朝の貴重な時は刻々と過ぎていく。依然として解けない問いに途中でなんとか一旦区切りをつけ、我に返り、壁に掛けられている時計を見ると8時を回っていた。

やばい 急がなくちゃ

部屋を駆け出て、階段を下くだる。

それよりも今日は大切な日だ。僕の人生での一大事。

こと

居間に降り、写真立ての置かれた引き棚の前で立ち止まる。
「父さん 行ってきます」

小声で写真の父に自らの意志を伝え、少年は家を後にした。

1 (前書き)

本編スタート

一月某日、ガーネット王国で創立祭が開催された。友人との約束の場所に向かうべく、少年は朝早くに家を出発した。

群衆の間から途切れ途切れに煌々（きらきら）しい光がちらつている。盛大な拍手、歓声を浴びて、王女グロリーフィア・ガーネットが悠然と人々の前を通り過ぎて行く。皆は、我先に王女の姿を一目拝もうと必死になっている。それもそのはず、彼女の姿を見た者には幸福が訪れると言われている。一年に一度開かれるこの祭典は、この国の建国記念日を祝うための催しで、僕は生まれてからずっと観に来ている。だけど、未だに王女様の姿を見たことがない。切望の的をその眼に収めた者は皆、口を揃えてと言う「美しい」と。そして満面の笑みを浮かべ、次の年もこの祭典に訪れるのだそうだ。そんな訳で、この通りはどこを見ても人ばかりで溢れ返っている。賑わう人々は波のように押し寄せ、平行に大きな列を成して並び、中央にはぼつかりと開いた空間ができています。そこに王国の楽器隊や鎧よろいに身を包んだ騎士達が行進していく。

この道は、“ブレイブロード”と呼ばれていて、表の正門から城まで一直線に伸びている。云われは、その昔にかつての王が絶望的くつがえとされていた戦況を覆し、この国を苦境から救ったとしているらしい。僕も生まれる前のことだから、詳しいことは知らないんだけど、今も語り継がれているということは、たいそう偉大な方だったんだろう。だけど、誰もその名前も知らないなんて不思議なもんだ。

一杯だなあ

けたたましい雑踏の中、僕は友人のルドルフに招待してもらった観覧席を探していた。城の従事者に与えられるという席らしいのだ

が、今までは一般に設けられるスペースに並ぶのが主だった僕は、例年通りの場所をうろついていた。

見つからない

早くしないと祭典が終わってしまうという焦燥に駆られ、居ても立っても居られない。

待てよ

忙しく動かしていた足を止めて、思考を巡らせる。

落ち着いてみれば、簡単なことだ。今居るのは、比較的に城とは反対側の正門に近い場所。やはり城の従事者に与えられるのだから、城に近い場所にあるのが道理だろう。

そうかあ、もっと上の方があ

今や表側の道は人々でごった返しており、ここから上手にある祭壇まで辿り着くのは到底無理だろう。しかし、まだ望みはある。裏道を抜ければ間に合うかもしれない。

結論に至ると見物する人々の間をすり抜けるように進み、少年は早々に裏道の方へと急いで行った。

表通りとは打って変わって、裏通りは閑散としていた。建物が陽光を斜めに切り取り、白と黒の二層に別れた一帯にはひんやりとした空気が漂い、どこか物悲しくも感じる。走っている最中に軒先の階段で腰を下ろして休むおじさんや何やらお祭り気分に分かれて白昼から仲睦まじ気に戯れている男女達を所々に見受けられたが、気にすることもなく進んだ。

よしっ あそこを曲がればもう少しで

少年は夢中になって角を曲がった。その先に何があるとも知れず、お構いなしに、
、
すると。

ドンッ！

一瞬、肩に圧力が加わったかと思うと視界が真っ白になり、後ろ

に吹き飛んだ。

「痛てててっ」

何かにぶつかつたみたいだ。

垂れた首を起こして見上げると、瞳に写ったのは全身を薄茶色の外套とつに包まれた人。

やっぱり慌てていると碌ろくなことはないなあ

反省しつつ、地面に尻もちを着いた状態から身体を起こして謝つた。

「ご、ごめんなさい、大丈夫ですかあ？」

「はい、そちらは？」

先方は斜めを向いたまま答えた。

こちらは身を翻ひるがえしたにも関わらず、向こうはビクともしていない。少年は内心驚いていた。

「えっと、平気です」

自分の方が不注意にもぶつかつたというに逆に気遣う相手に頭が上あがらない。

「そうですか 良かった」

前方の人はやや無表情だが心配そうに言った。

深々と外套のフードを被つていて顔はよく見えないが、口元は薄っすらと微笑んでいるように見えた。

「それでは、お気を付けて」

少年がフードで覆われた顔を窺うかがおうとしている隙にも、薄茶色の外套は瞬く間に視界の枠わくから外れていった。

「あつ、すつ、すみませんでした」

すらりとした身のこなしで立ち去る相手に少年はぺこりと頭を下げた。

なんて良い人なんだ

思いがけず、紳士的な振る舞いに感慨深く思う。

って のんびりしている場合じゃない

はっと気付き、顔を上げると路地の切れ目から空が覗いている。

よしっ

ぎゅつと拳を握り締めてから、いざ光の射す方へ目掛けて再び歩き出した。

裏道を抜けるとそこは門側とは別世界のように景色が一変していた。銀色の鎧よろいに身を包んだ兵士達が整然と立ち並び、道沿いを取り囲んでいる。その後ろにちらほらと普段着で練り歩く人達が点在している。

え〜つと

様々な人々が入り混じる中で思い当たるそれらしき人影を探した。

ん〜 見つからない

さつと下方を見るも見当たらなかったのでさらに上方を目指してみた。

何やら上がっていくに連れて仰々ぎょうぎょう（しい雰囲さいだん気になつてくるが、中々見つからなかったなので、とうとう祭壇さいだんを拜められる最上部らしき所まで来てしまった。前方には逸はやる気持ちを抑え、じつと並んでいる人達が窺うかがえる。

あっ！

その中に見覚えのある横顔を見つけた。周囲の人からひよっこりと頭の先が出ている。

友人と思わしき人物に視線を送りつつ近づいていく。

徐々に見えてくる恰好。

大体175センチぐらいの長身瘦躯には、濃紺のこ紺のぴっちりとした長袖と暗い深緑ふかみどりの長ズボンが黒いレザーベルトで締められ、足元にはダークブラウンのブーツが履はかれていた。明るい茶色のスマートなショートヘアと精悍せいかんな顔付きが特徴的だ。

近寄る気配に気付いたのか、向こうはこちらを顧かえりみた。

「おう」

先方と振り向きざまに目が合って、

「アモル」面長の爽やかな笑顔と
「ルドルフ」真っ直ぐなお人好しは
重なるようにお互いの名を口にして再会した。
「ちようど今から始まるところだ」

間に合った

ルドルフが言ったのに僕は安心して一息吐（っ）いた。

毅然として凜々（りり）しく振る舞う金色の衣装を纏った輝きが、灰色の石畳を水平に移動する。騎士団の護衛に四方を囲まれているが、その存在感は圧巻である。一挙一動が何から何まで無駄がなく研ぎ澄まされており、堂々たる様は、正に“優美高妙”の一言に尽きる。

「おーっ　すごい」と思わず、感動を口から漏らしてしまう程に。

王女様はその美貌に反し、とても御若い。弱冠14歳という年齢で王位を継承されて2年とまだ間もない。

人々が感嘆していると王女様は黄金の絨毯を敷かれた祭壇に登り、王席に着いた。

そろそろこの祭典のもう一つの要である英雄の行進が始まる。

王国の聖歌隊の演奏が終わった後、皆は固唾を呑み、国全体が静けさで満ち溢れる。

すると、入り口の門の辺りから、怒号にも似た叫びと大地を揺り動かすような人々の響動めきが上がり段々と近づいて来る。

ウオーッ！　遠くから猛々（だけ）しく咆哮する声が耳に届き始め、人々は一斉にその方を振り向いた。

カタッ　カタッ　カタッ　馬の蹄が石畳を叩き、力強く跳躍する。躍動と一つになって歓声が沸き上がり、彼方から現れた馬上の騎士は、眼前を疾風の如く駆け抜けていった。

騎士が祭壇の前に行き着くと馬からすつと地上に降り立ち、手綱を側に居た城の従者へと渡した。地面が直立する堅固な巨漢は強者特有の剛健な雰囲気醸し出している。背中には彼の業物である大剣が柄に収められている。

騎士はこちらに体軀を回すと鞘から大剣を抜き、矛先を高々と空に翳した。刀身が太陽の光を反射し、眩い輝きを放っている。大剣を鞘に戻すと兜を取り、片手に携え、一步二歩と王女様の許に歩ん

でいった。

遠くからでも分かる程の彫りの深い顔立ち、その中に何事にも揺るがない屈強な瞳が目立っている。

王女様の前に立ち、深々とお辞儀をする騎士に合わせて王女も軽く会釈えしやくをする。

一礼を終えた騎士は王女様の御前ごぜんにて膝ひざを黄金の絨毯じゅうたんに付き頭を下げた。同時に王女様は王席から立ち上がり、皇位の重役より用意されたバッジを受け取り、我が方へ両手を差し出す騎士へと授けた。バッジが手渡されると共に、国民はこれまでになく歓喜し、大いに盛り上がる。

彼こそがスターク・ウォルター。言わずと知れたこの国の英雄であり、王国騎士団の団長でもある。去年に引き続き本年も“ブレイブ”は彼に決まった。ブレイブの称号はこの国に最も貢献した勇敢な者に与えられ、授与した者には騎士団の指揮権と王国会議への出席が許される。

王国会議では国内の律や各国への対応などの重要な案件が取り決められる。通常、一般国民の参加は認められていないが、ただ一人ブレイブの称号を持つ者には国民の代表としてその席が用意される。スタークはこの国で僕らの憧れの存在。十数年前に戦乱さなかの最中、この国を他国から守り、僕達が一番恐れている獣の長を討つたとされている。だから国民は皆、彼に敬意を表して“英雄”と呼んでいる。僕が今日ここに来たのも自分が志願する騎士団の団長の姿をどうしても見ておきたかったからで、無理言つてルドルフにお願ねがいした。本当ならシビック ガーネット王国の一般国民が通う学校を卒業した時に志願するべきだった。どうしてしなかったのかあ……それは、まだ自分に自信が持てなかったからだと思う。

まさかと思っていただけ、長年の念願が叶って王女様の姿を拝見できたのは予想外だった。

(へへっ)

何か良いことあるのかなあ

なんて、浮かれた僕は現まを抜ぬかしていた。

国民が祭典に夢中になっていた頃、城の侍女頭フランソワーズは窓から城下を見渡し、今年も無事に式を終えられるようにと案じていた。

先の尖った銀縁眼鏡を掛け、堅硬そうな目つきが印象的な初老の淑女は、城の3階にある広間に居た。襟元と袖口の部分が白く、膝を隠すぐらいに長めの暗赤色のワンピースの上に、外周部に金の網目の刺繍が施された白い前掛けをし、襟元を下地のワンピースと同じ色の暗赤色のリボンで結んでいる。スカートから伸びた足には、清潔感漂う白いハイソックスと、ちんまりとした黒いパンプスが着こなされている。

この広間は謁見の間と繋がっているため、高級な美術的作品が壁や天井に描かれている。豪華な雰囲気が漂う中、窓際でフランソワーズは、心配そうな顔をしていた。白銀の髪をシニヨン 後ろに一纏めにした団子のような髪型 にして、その上に暗赤色のカチーシャを付けている。150センチぐらいのやや小柄な身体は華奢でマツチ棒の如く、落ち着かず何度も城外を窺っては、王女様の御身を気にして。

心配していた矢先、彼女の許へ一報が入った。

「失礼致します」

全身を銀甲冑で包まれた城の護衛が、慌ただしく告げた。

「騒がしい 何事ですか？」

急かされた侍女頭が、驚きを見せるや、

「突然の失礼をお許し下さい」

兵士は兜を脱ぎ、速やかに礼を入れ、ふんつと荒息を立てて、眉間に皺を寄せるフランソワーズに向かって、畏まって伝達する。

「城内に何者かが侵入した形跡がございます」

「何っ？」

侍女頭は耳を敬そはてて、目を丸くし、

「それは真まことですか？」

声を張はって聞き返した。

「はっ、はい」

頼りなさ気に応じる護衛を目の前に

「全く 王女様が不在の今 何かあつては このフランソワーズの命めいにも関わります」

侍女頭は襟えりを正し、身を引き締めて、

「城内じやういの状況は！？」

まず、事態の詳細を聞き出した。

「はい、只今確認しているところですが、数名の護衛が侵入者を目撃したとのことです」

回りくどく説明する兵士に、堅硬けんこうな目つきは問い質たす。

「それで？」

「現在 全力で搜索しております」

自分達の失態を誤魔化し主張する兵士に侍女頭が一喝する。

「どうして簡単に侵入を許してしまうのですか？」

「もっ 申し訳わけございません」

透かさず銀兜ぎんかぶとが謝罪をするも、侍女頭は肩を怒らせ、さらに役割の意味を言及した。

「これでは何のための護衛が分かりません！」

黙り沈む護衛を暫しばし目に遣やり、侍女頭は喉元のどもとに力を込め話し始める。

「この大事な時に城内の平安を乱す訳にはいきません」

さらに真剣な面持ちで念を押して、面前めんぜんの兵士に言い渡す。

「何としても見つけ出すのです」

「はいっ、直ただちに」

受け取った護衛は一目散いちめくぱんに与えられた任務に取り掛かった。

フランソワーズの指示を皮切りに城内では一斉に兵士達が駆け回

る。

廊下を走る兵士が突き当りに到達し、嘆息し、

「くっそー こちらもかあ」

また、曲がり角から出て来た兵士が上官を見つげ、報告する。

「班長 見当たりませんでした」

「はい はい」

いちいち報告しなくても大丈夫だって

怠^{だる}そうに返事をしたのは、面倒がり屋の騎士団の班長フリード・イージング。不本意にも駆り立てられて機嫌を損ねているようだ。

大急ぎで用意をしたため、兜^{かぶと}を着ける余裕がなかった。そのため、くすんだブロンド色の片方だけが目に差し掛かる位^{くらい}伸びた前髪と、やる気の無さそうな面^{つら}が銀鎧^{ぎんよろい}からひよっこりと顔を出している。

「じゃあ そうだなあ 内庭^{うちにわ}の方を探してもらおうか」

搜索に戻るよう、兵士にそれとなく指示した後、自分も任務に戻った。

みんなで探してるんだから 逃げようがねえって

心中に思いながら、イージング班長は上階の方へ歩を進める。

階段を上り、王族達が住まう最上階に着くや否^{いな}や、廊下の反対側に見知らぬ人影を目撃した。

「おいつ？」

途端、全力で走り追いかけるフリード班長。

「まつ 待ち」

彼に気付いたのか、影はすらりと近くの部屋に入って行った。

そこはまずいつて！

心臓が内側から脈を打ち、焦る。

入るなあーっ？

班長は胸中で叫びながら、最奥の部屋へと辿^{たど}りついた。

扉の前には護衛の兵士が数名横たわっていたが、今はそれどころじゃなかった。侵入者らしき人影が入ったのは、城内で最も守らなければいけない王女様が住まう御部屋なのだから。

慌てながらも、室内に入る前に一度立ち止まってから、フリード班長は素早く入室した。

早速目に飛び込んできたのは数々の煌びやかな装飾品。天井から吊るされたシャンゼリア、床には花の模様が編み込まれた絨毯とその上に長椅子とテーブルが置かれている。壁には、至る所に金色の粒がはめ込まれている。

先程の者が何処に潜んでいるか分からないので、班長は慎重に行動した。目を凝らし、集中して左右を窺い、耳を澄ますも人の息や気配は感じ取れない。

どこに隠れている

内心冷や冷やしながらも、いつ相手が襲ってくるか分からない緊張に全身が圧されて、額には汗が浮かんできている。

……あつ

室内を隈なく探していると、初見では見落としていたが、扉が一つあった。

すぐさま確かめようと忍び足で接近し、扉の前で一旦立ち止まった。

奥かあ

ゴクリ、と固唾（かたす）を呑み、意を決した班長はドアノブに手をやり、恐る恐るもう一つの部屋に足を踏み入れた。

スウーン 扉と金具が擦れ、音を発する。

開け放たれた扉の向こうには仕切りの付いたベッドに、化粧台、壁一面を覆っている本棚にはぎっしりと蔵書が詰まっている。どれも高級感が溢れており、全体的に赤色の色彩が持ちいられている印象がある。

どうやらここは王女様の寝室のようだ。

今まで自分が見たこともない光景を目にし、一瞬見入ってしまったが、班長は気を取り戻して奥に進んだ。

ぱっと見回しても隠れられそうなところはなかったが、一通り探す。

んっ？

程なく、足元に微かに通る風を感じた班長は、風の吹いてくる方に目を遣った。

窓は開き、カーテンがはためいている。

まさか？

感付くままに窓際に進み寄り、城下を見下ろす。

おいおい、嘘だろ

ここは城の最上階。よって目が眩む程の高さ。

ここから逃げた？

到底有り得ない状況に困惑し、班長は思い悩んだ。

一体どう報告すればいいんだ

「見失った!？」

目を剥いて、甲高く憤慨するのは侍女頭フランスワーズ。

驚きの余り大きく開いた口を閉じてから、

「しかも王女様の御部屋に無断で入るとは何ごとですか？」

きつく怒り立て、眉間に皺を寄せる。

「はいっ」

叱られるイージング班長は視線をやや下に落として、申し訳なさそうにしている。

その態度を見据えて、侍女頭は荒息を立て、説教を始めた。

「だから 平時より 気を抜かぬようにと申しているのです」

「はい」

侍女頭は諭しながらも、どこか焦っているように見える。黙り沈んでいる班長を前にして、拳動が心なしに落ち着きがなく、取り急ごうとしている。

王女様がお戻りになるまでに何とかしなくては……

侍女頭は胸中で焦燥に駆られていた。長年、侍女としてガーネット家に仕える身としては、この城は今や守るべき拠り所。王女様が

帰ってくるまでに事態を無事、收拾したい。

「とにかく、この件は私の方からグロリーファイア様にお伝えしておきますので、あなたは元の任に戻って下さい」

フランソワーズは義務感に急ぎ立てられ、簡略的に処理した。

「承知しましたーっ」

思いの外軽度だった弁舌から免れ、班長は一刻も早くこの場から立ち去ろうとした。

そこに、侍女が釘を刺した。

ぬっ、と班長を睨み、付け足す。

「それと、他の兵士達にもくれぐれも騒ぎ立てることのないようにお願いしますよ」

「はいっ、失礼します」

班長はこれ以上お咎めを受けぬように大人しく礼を済まし、負傷者の容体、破損物の有無の確認などの後片づけに向かった。

ふーっ 離れていく班長を見送り、侍女頭は肩の荷が少し下りて、束の間の安堵の表情を浮かべた。

これにて城内は一時、静けさを取り戻した。

白昼。

祭典が終わると、英雄の道（ブレイブロード）にはぞろぞろと屋台が出店し始めた。店頭には、アクセサリーや地元料理といったお馴染みの物や普段見るこのにない珍しい骨董品（こつとうひん）などが置いてある。そんな中、僕とルドルフは昼食を求め、屋台が立ち並ぶ通りを散策していた。

「それでさあ ルドルフ」

唐（突）に話を切り出す僕に、

「あつ なんだ？」

ルドルフが応えた。

「騎士団のことなんだけどさあ」

僕が相談を持ち掛（か）けると、

「ああ」

ルドルフは相槌を打って反応する。

おーっ、と溢れ返る人込みに押されて、僅（わず）かに躊躇（ためら）ったが、話を続ける。

こんなところで言うのはどうかと思ったけど、単刀直入に告げた。

「僕も騎士団に入りたいんだ」

「いいんじゃないかあ」

長身のルドルフは、爽（さわ）やかな顔ですらっつと賛同した。

「あつ、うん」

てつきり制止されるかと思っていてから、僕は少し拍子抜けした。「でも どうして騎士団になんかに入りたいと思ったんだ？」

ルドルフは自分の所属する騎士団を謙（へりくだ）るような言い方で訊（たず）ねてくる。

「えっ、つと それは……」

僕は予想外の言い様に、答えようとしたが上手く言葉が出てこな

い。

ルドルフは、僕が発しようとしてるのを覆うように言った。

「騎士団は本当に辛い事ばかりだぞ、訓練だって厳しいし、煩わしい規則もあるからなあ」

「そつ、そつなんだあ」

僕はルドルフの話聞きつつ、屋台の方に目を向けた。

通りを行き交う人々が目の前を往来して、はっきりとは見えなかった。

「そつさあ」

お祭り気分で浮ついたルドルフは、調子に乗って話す。

「報酬だって割に合わないし 上官がどうも頼りないんだよなあ」

「へえ〜」

頼りない上官かあ 一度見てみたいもんだなあ

内部事情はよく分からないが、それとなく波長を合わせた。

んっ？ 息を吸って匂いを嗅ぐと、通りにはいつの間にか肉の焼けた香ばしい匂いが漂っていた。

「でも、厨房の料理だけは美味いんだよなあ」

ルドルフは肉の匂いに煽られたのか、御飯の話に移った。

料理かあ 母さん忙しいだろうなあ

生誕祭は昼からが本番。国民は明日の朝まで盛大に飲み明かし、夜には広場で集まり、ダンスや演奏なども行われる。

「とうか お腹減ったなあ！」

ルドルフは、いきなり快活に言い放った。

「おう」

ふと心配になったが、どうやら僕も空腹らしい。

それから、神経を集中させて辺りを見回したルドルフは、早々はやばやと肉の匂いから店の場所を嗅ぎ付けたみたいで、

「これはスペアリブの匂いだあ」

ハンターの目になって、呟いていた。

スペアリブかあ

僕は脱帽だつぼうしたい気持ちになった。

流石さすがの僕もそこまでの確には判別できなかった。騎士団で訓練をすれば、きっと鋭敏えいびんな嗅覚きゅうかくも身に付くんだろっなあと、羨ましく思うう。

そんな思いを巡らしているところに、

「早く飯にしよう!」

ルドルフは清々せいせい(さすが)しく声を上げ、

「うん」

僕は勢こたいに応こたえるように返事をした。

僕等は合点し、スペアリブの売っている店へと飛び込んだ。

演奏を終え、祭壇（さいだん）の袖に控えていた側近ヴィオラ・カルマートは王女が来るのを静かに待っていた。

オリーブ色の長い髪を後ろで括（くく）り、残りは顔の左右を通って、胸辺りに乗っている。

緑の長髪と白色（はくしよく）の肌が特徴的な彼女は、控えめな性格が表出したようにその容姿も控えめで慎ましく、ピッチリと着込んだ礼服によって身体の縦のラインが一層際立てられ、細長い印象がある。

畏（かしこ）まった荘厳な雰囲気から一変して、湧き上がる国民の拍手が聞こえ出すと共に王女グロリアフィアは優雅に祭壇を降りてきた。金色の淑（しと）やかな長髪が段を下りる度、さらりと揺れる。透き通るような白い肌はどこまでも染み渡りそうな深層水の潤沢を思わせ、上品な顔立ちはさらにその美しさを増す。

白を基調として、所々に金の刺繍（しゅう）を施しているドレス、頭には赤い宝石が散りばめられたティアラ、両腕には白いレースの長手袋に、銀色の輝きが鮮やかな足元。

側近という立場故（ゆえ）に普段から間近で見る機会が多いとはいえ、今日のような晴れ舞台に相応しいドレスを召（め）している王女は、似合いすぎて目を合わせるのが恥ずかしくなる程綺麗だと思ふ側近ヴィオラ・カルマートだった。

そんな心境の中、檀上（だんじょう）を降り終えた王女に側近ヴィオラは祝福の言葉を肅々（しゆくしゆく）と捧げる。

「王女様、本年も誠に絢爛（けんらん）で御座いました」

真っ先に快く迎えてくれたヴィオラに、グロリアフィアは胸許で上品に手を合わせ、

「ありがとう、貴女（あなた）の演奏とても素晴らしかったわ」
喜びを露にした。

「とっ　とんでもございませぬ」

側近は恥ずかしそうに目を伏せて、照れている。

もじもじとする側近に、王女は優しく言い掛ける。

「行きましようか」

「はい」

はっと気づいた側近は、すぐに王女の右手に着いた。すると、周
圍で準備していた銀の鎧^{よろい}達は王女様を守るように陣を形成する。

二人は騎士団の護衛と共に城へと歩き出した。

スペアリブを食べながら、次に僕達が向かったのは飲料店。スペアリブは思ったより口内の水分を吸い取るみたいで、喉のどが渴かわいてしまった。食べることしか考えていなかった僕とルドルフは虚きよを突かれ、急いそいで潤おおいいを補給しようとした。

人込みの間をすり抜けながら、正門の方へと下って行く。僕の記憶が確かなら、ちょうど城と門の中間辺りのところに飲料店が在あるはずだ。

あつ！ と途中で、隣のルドルフが道の横を見やり、立ち止まった。

何やら面白そうな店を見つけたみたいだ。

「あそこ良いんじゃないかあ」

「ああ」

思い付いたように呟つぶやくルドルフに、僕は短く応こたえた。

今はできるだけ早く水に辿たどり着きたい。まだ僕が知っているお店まで距離がある。

「行くかあ」

僕の心境を感じ取ったのか、ルドルフは即座せきざに決断を迫せまった。

「おう」

感化かんか（かんか）された僕は、先に行くルドルフの背中を追った。

王女が城に着くと、護衛の騎士は入り口の外側で立ち止まり、王女は皇族等と共にその間を通り抜けて行った。両開きの扉をくぐり、城内へと入った先には侍女達がいつにも増して仰々（ぎょうぎょう）しく待ち構えていた。彼女達は真ん中にある金色の絨毯（じゅうたん）を挟み左右に分かれて、長々と列を成している。

「おかえりなさいませ」

扉から入ってくる王女様に侍女達は声を揃え、深々と礼をした。

王女は真つ直ぐ進み、皇族達は右や左に逸（そ）れ、それぞれの持ち場へと戻っていく。

王女が列の一番奥に近づくと、侍女頭フランソワーズが一步前に出て、軽く会釈をし、粛々と口を開いた。

「王女様、大変御疲れ様でした」

王女は挨拶をするフランソワーズを優しく見守って、先方が御辞儀を終えた所で、

「只今」

にこりと答え、頭に飾り付けていたティアアラを取り外し、

「本年も良い祭典でした」

言いながら、差し出された両手に載（の）せた。

ティアアラを大切そうに受け取った後、

「然様（さよう）でございますか」

フランソワーズは笑みを返して、心配深く祝う。

「無事に終えられて何よりで御座います」

続いて、王女は柔らかい声音（こゝろ）で控え目に感想を述べ始めた。

「ええ、皆（みな）快く迎えてくれて嬉しい限りです」

「はい」

フランソワーズは首を大きく縦（た）に下（おろ）して頷（うな）き、一言も逃（に）がさぬように聞き入る。

「このような穏やかな日にも恵まれて誠に光栄です」

話し終えた王女は、フランソワーズの目を軽く見つめ、

「それでは行きます」

丁寧に挨拶し、右手にいる側近に目配せをして居室に戻ろうとした

た その時、

「姫様、恐縮ですがお話がございます」

フランソワーズが周りの者に気付かれぬように、王女にひっそりと囁（ささや）いた。

瞬時に何かを悟った王女は態度を変えことなく、横目でフランソワーズを一瞥（いちべつ）して、静かにその場を後にした。

「騎士団の志願ならいつでもやっっているぞ」

青い半透明のビンを片手にルドルフが教えてくれた。

僕は口の中に微妙に残った炭酸水を呑み込み、耳を傾けて聞いた。

「（へえ）」

知らなかった

「騎士団の応募はいつでも行っている」

さらに詳細を語り始めたルドルフは、時折炭酸水を飲みながら、爽快に述べ上げた。

「試験は 城内の手が空いているとき つまり 休みの日に多く設けられる」

さすが 騎士団所属だ

そこで、炭酸水を飲み干してしまったルドルフは細長いビンの首を軽く撮み、ぐるぐると揺すって、物足りなさそうにしている。

僕は感心してすぐに、次の順序を訊いた。

「どうやって申し込めばいい？」

「あつ、ああ」

ルドルフは炭酸水をもう一本飲みたそうにしながら、手短に答えた。

「役場（やくば）に行つて申請するんだ」

役場かあ、なら明日にでも行こう

僕は決心して、今にも炭酸水を買に行こうとしているルドルフを見計らつて、話題を変えてみた。

「昨日不思議な女の子に会つたんだ」

ルドルフは頻りに歩き出す機会を窺いながら、適当に返してきた。

「アモルはメルヘンチックなのが好きだからなあ」

ルドルフの目線に釣られて僕も飲料店の方を向いた時。

あつ

ちょうど話題に上がった件の少女らしき人物が目に入った。人込みの中に紛れては消えて、ちらちらと写る横姿は、昨日僕に鮮烈な印象を残した面影がある。僕はそれを目で追った。

少女は独特の雰囲気かもを醸し出して、大勢の中においても浮彫りうつきぼに見える。たまに人にぶつかりそうになって、あたふたし、また進んでいく。

どこに行きたいんだろう？

タイミングが良かったせいもあるのか、僕は少女の行先が気になった。

「おいっ、どうかしたのか？」

ぼんやりと意識の外から声が入って来て、はっとし、

「あっ、いやなんでもない」

我に返ると、ルドルフが目の前に立っていた。どうやら僕は少女に見とれていたみたいだ。

ぱっとルドルフに目をやると、その手には青い半透明のピンが握られている。

もう買ってきたのかあ

気付けば、僕は途中で立ち止まっていたみたいだった。

ルドルフは本日二杯目の炭酸水を口に含みながら、先ほどの続きを訊いてきた。

「それで、その女の子とはどうなったんだ？」

「えっ、っつ」

僕は答えようとして、ルドルフの肩越しから再び少女を探した。

あちらこちらに目を向けた後、人と人の間を行き交う少女をにわかひたひたに捉えられた。

いたっ！

「ちょうどあそこに居るんだ」

ルドルフに説明して、追おうとしたが、間もなく少女は群衆に入り雑まじっていった。

王女グロリーフィアは祭典用の煌びやかなドレスから、赤ワイン色の色彩を抑えた平常服に着替えた。

全体的には、ピッチリと身体のラインが出た細長いドレスで、胸の上から手首までは白いシャツが伸びており、襟元を金色のリボンが付けてある。胸と腰に掛けては、オレンジ色の布地を白の細い紐を縦に通しているコルセットで締めているため、より細さが強調されている。膝下まで伸びたスカートには、控えめのパニエが仕込んであり、軽い品のある膨らみを見せている。

その下から覗いている純白のハイソックスには、光に反射して所々に金の微小な粒が煌めいている。地面に接しているのは、靴底の低いオレンジ色のパンプス。前部には、柘榴の花を模した装飾があらわれ、甲の部分にはストラップがあり、しっかりと足を固定している。

平服に身を包み、祭典時の高揚から平静に気持ちを入れ替えたグロリーフィアは、居室にて侍女頭フランソワーズより城内に何者かが侵入したという知らせを受けた。

「そうですか」

グロリーフィアは、フランソワーズの端的な説明を聞き終え、軽く息を吐く。

長椅子に並んで座っている王女と侍女頭。

侍女頭が心配そうな顔をしているのに対して、王女は平然と落ち着いている。

室内には緊迫と緩慢が混ぜられたような、何とも言えぬ空気で満ちていた。

「申し訳ございません 私の手が不届きだったばかりに」

静けさに耐えきれず、侍女頭は心苦しそうに口を開いた。

王女はその様子を優しく見つめる。相手の体調を気遣うように。

「いいんですよ」

そして、強張こわばっている侍女頭おたに穏やかに声を掛けた。

はっと目覚め、次第に圧迫が和らいでいき、正気を取り戻した侍

女頭は、

「姫様」

目尻じりを涙で濡らし、感喜かんきした。

「婆ばあや」

元気になったフランソワズを見て、グローリフィアも明るく応こたえた。

グローリフィアは、自分の生まれた時よりずっと側に仕つかえていたフランソワズに対して、最早肉親もはやのような親近感を持ち、多大な信頼を寄せている。

また、フランソワズはお世話をしていき、その成長を見守る中、いつの間にか親心のようなものを抱くようになっていった。

グローリフィアの優しさにより落ち着いたフランソワズは、おもむろに口を開いた。

「兵士の報告によれば、負傷者が数名出たものの、傷は大たいしたことなく特に盗まれた物はないようなのですが……」

フランソワズは怪訝けげんな顔で眉まゆをひそめ、グローリフィアに持ちかけた。

「果たして、何故なにゆえに忍び込んだのか」

グローリフィアは相槌あいづちを打ち、

「ええ 皆みなが無事で安心しました」

何より城の者が無事であったことにほっと胸なを撫なで下おろし、樂觀的意見を述べた。

「理由は分かりませんが、然程さほど問題ないでしょう」

これに驚いたフランソワズは、食いつくような勢いで進言した。「しかし姫様、きつと何か企たくみがあるはずです。不謹慎ふきんしんですが、そうでなければ、このように被害が少ない訳がありません」

「ええ、そうねえ」

表面上は繕^{つくろ}っていたグローリフィアだが、内心は気掛^{きか}りでならなかった。

まさか あれが奪^{うば}われたのでは……

考え込むグローリフィアをよそに、フランソワーズはさらに詳しく述^つべる。

「昨^{さつ}今の国内の治安から 国民が策^{たく}略^{りやく}を立てることも考えられませんし お隣のノルワード公国は平和を掲^かげているだけあって、他国を侵略^{しやうりやく}するようなこともないと思われますし」

「

反応^{はんおん}が返^{かえ}って来^こなかつたのを不思議^{ふしぎ}に思^{おも}ったフランソワーズは、窺^{うかが}いを立^たてた。

「姫様^{ひめさま}?」

はっと息^{いき}を呑^のんだグローリフィアは、フランソワーズが心配^{しんぱ}そうにこちらを見^みているのに気^きづき、慌^{あわ}てて先^{つな}を促^{うなが}す。

「なっ、何でもござ^ないません、続^つけてください」

グローリフィアは、どうかか自分の考^{かんが}えている事^{こと}を読^よまれないうに取^とり繕^{つくろ}ったつもりだった。

だが、フランソワーズは見^み越^こしたように頷^{うなづ}いた。

「そつでございますか」

?

その言^{こと}動^{どう}に咄^は嗟^さに理^り解^{かい}がで^きず、固^かまるグローリフィア。

そこにフランソワーズは、肩^{かた}から息^{いき}を吐^はき出^ですように言^いい出^でした。

「やはり狙^{ねら}われたの例^{れい}のあれかもしれません」

(えっ?)

グローリフィアは、一瞬^{いつしん}自分の耳^{みみ}を疑^{うたが}った。

あれとは、自分の指^{さし}しているものと同じなのかどうか。

「どつして」

言葉^{ことば}は意^い識^しせず、自^{おの}ずと零^{こぼ}れ出^でた。

「はい」

フランソワーズは素^す直^{ちく}に受^うけ、躊^{ちゆう}躇^{ちゆう}することなく打^{うち}明^あける。

「グレイシア様より言い付かっておりましたことでございます」

驚きの余り、グローリフィアは目を見開いて、感嘆の声を上げた。

「母上がっ」

「はい」

フランソワーズは実直に首肯し、当時の事を思い返して語り始めた。

「あれは姫様が王位に着かれる少し前のことでございます。姫様の戴冠式を間近に控えた夜、グレイシア様は側でお仕えしていた私奴にお声を掛けなされたのです」

話が始まり、グローリフィアはまじまじとフランソワーズを見つめている。

「生前 病に伏されていたグレイシア様は おそらくもう長くはないとお悟りになったのだと存じます。それは近くで見ておりました私共からも見て取れました」

グローリフィアはぐっとも言わず、真剣な面持ちで聞き入っている。

「グレイシア様はそのような中でありながら、この私奴に貴重なお時間を割きなされたのです」

フランソワーズはその姿を見る余裕もなく、精一杯の言葉を紡ぐ。「初めはあまりの事の大きき故に私は少々理解に苦しみました。ですが、グレイシア様の懸命な顔を見る度にこちらも胸を熱くさせるばかりでした」

強くなる語調と呼応するように、フランソワーズの両手は胸元に引き寄せられ、自然とその拳にぎゅっと力が込められる。

「例の文書に関して、まさかそのような人知を超えた力があるなど、到底信じられませんでした」

それを聞いて、グローリフィアの身体は微かに動いた。心の中の気持ちを表すように。

「ですが、グレイシア様がおっしゃった事であれば、それは真なのです。私は努めて言い付けられた任に就こうと思いました」

そこまで話し終わると、フランソワーズは一度黙り込んでから、目を閉じて、祈るように言った。

「そして最後にグローリフィア様を頼みますとおっしゃいましたそれがグレイシア様が生涯最後にお告げになったお言葉でございます」

「母上つ（涙）」

グローリフィアは思わず、涙ぐんでしまった。

それから室内には、しばしの沈黙が訪れた。押し静まった無言の空間の底に沈んだ意気が深く漂い、その塊かたまりは重く、滅多に払拭はらひきできそうもない。

ただ暗闇の中で光を探すように、ひたすら希望を見出そうとしていく中、流れは変わり始めた。その結果、塊かたまりの内部から蠢うごめき、じわじわと水位を上昇させていく。

気持ち完全に満たされるか、されないかの際きわに至ると、どちらから切り出すでもなく、動きがあった。

片方が長椅子からゆっくりと重心を前に傾けると、もう一方がそれを窺うかがい、後に続いた。

二人は言葉も交わさずに立ち上がり、自室の扉へと歩き出す。

扉を開ける前に立ち止まったグローリフィアは、隣にいるフランソワーズの方を見た。それに合わせ、フランソワーズもグローリフィアの方を見て、二人の目が合った。

「行きましようかあ」

二人の間を繋ぐようにグローリフィアが声をかけた。それが合図だった。

扉が開く。

自室に入ると、グローリフィアは真っ直ぐに本棚へと足を向けた。そして、数多くある蔵書の中から下段の隅に置いてある朱あかい本を棚から引き出し、その奥にある壁を細い指で押し込んだ。

間もなく、本棚は音も無く、数十センチほど横にスライドした。

そして、本棚が移動したことによって隙間が生じた。一人一人がどう

にか入れることのできるような極めて細い隙間。その奥には、本当なら金色混じりの白い壁が見えるはずなのだが、今は黒い闇が見えている。

初めて目の当たりする光景にフランソワーズは、ごくり、と息を呑み。グローリフィアの動向を窺った。

グローリフィアは、窓際にある机から夜に手元を照らすために愛用している手提げランタンを取り、その手に持つと、本棚の前に立ち尽くしているフランソワーズに凜々（りり）しく告げた。

「この奥です」

「はい」

フランソワーズは固く返事をして、グローリフィアと共に暗闇の中へと足を踏み入れた。

ランタンの灯りが四角い空間の壁を照らし出し、色が黒から温かみのある橙に変わった。

二人は入り口を通り抜けると、グローリフィアは身を屈め、自室からちよつど反対に位置する壁の窪みを押し、壁がスライドすると共に外光が遮断された。

グローリフィアが立ち上がり、二人が隠し部屋の真ん中に目を向けると、そこには正方形の四脚机とその上に分厚い一冊の本が寝ていた。

「これは」

フランソワーズは、思わず驚きの声を漏らした。

「はい」

グローリフィアは落ち着いて受け取り、丁寧に説明する。

「この本こそが母上や父上がおっしゃっていたものです」

フランソワーズはその言葉を聞いて、肩に力が入り、微かに慄いた。

（これが）

グローリフィアが机に近付き、本に手を伸ばした時、フランソワ

ーズの緊張は最大限に達した。

ひっ、としゃっくりをしたような声を出し、フランソワーズは全身から変な汗が流れているのを感じ取れた。

グローリフィアが本を開き、ページを捲めくっている中、フランソワーズは恐る恐るグローリフィアの許へと歩み寄った。

グローリフィアの隣に着いたフランソワーズは恐れながらも、訊たずねてみた。

「ひっ、姫様、私はこのような大事な場に居てもよろしいのでしょうか？」

縮こまるフランソワに少し驚いたグローリフィアは、一旦本いったんを読むのを止めて優しく返す。

「もちろんです、婆ばあやに立ち会ってほしいんですよ」

その時、フランソワーズは身体の力が全部抜けてしまいそうになった。安堵感に包まれ、自分が今まで仕えてきたことを再び誇りに思うフランソワーズ。

フランソワーズが感謝に浸っている横で、グローリフィアの手がふと止まった。

「
」
急に焦った様子で何度も同じページの所を確認するグローリフィア。

その様子を感じ取り、異変に気付いたフランソワーズは顔を引き締めた。

やはりですか

グローリフィアは、心中で落胆らくたんする。

深く息を吸ってから、憶測が現実になったことを遠回しに口にする。

「婆やの言っていたことは 間違いじゃないみたいです」

「えっ？」

唐突に言っていることが呑み込めず、フランソワーズの時間は一瞬止まった。

遅れて、理解するのと同時に総毛立そうけだった。

愕然がくぜんとするフランソワーズにグローリフィアが改めて言い直す。

「このページだけが抜き取られています」

流石さすがのグローリフィアも僅わずかに身震みゆずいを起こしていた。

「どういたしましょう?」

フランソワーズは、自らの不安を真まっ先に零こぼした。

グローリフィアも同じよう動揺していたが、何とか平静を保って安心あんしさせるように応こたえる。

「不幸中の幸いとも言いましょうかあ……、ひとまずこのページ以外は無事むじのようです」

「そうなのですかあ」

フランソワーズは文書のことを詳しくは知らず、グローリフィアの話はなしを信じるしかなかった。

「ええ」

グローリフィアは場を取り持つように返事をし、なだめるように言う。

「ですから 安心してください」

それでもフランソワーズの胸むねに居座いざる疑念ぎねんを拭ぬぐい切れなかった。

「しかし 姫様」

フランソワーズが言い出すのを覆おほつようにグローリフィアが口を出した。

「確証かくじょうは持てませんが 力ちからを使えるのは王位おういのものだけらしいので 大丈夫だいじゆうです」

言っている本人も本当かどうか定かではなかったので、語調ごてうが揺らいでいた。

「それにこのページに書かれていたことは大して重要な事項じくじょうではなかったはずです」

「はい」

自分に何かできることないか、とフランソワーズは真剣しんけんに黙もくって聞いていた。

フランソワーズの真つ直ぐな態度に押されるように、グローリフィアは思わぬことを口走くちほしってしまった。

「ただ気がかりなのは何の目的で盗んだのか？しかも特定のページだけ切り取って……、必要とあればこの書物しょもつごと持ち運ぶこともできたはずです」

フランソワーズはグローリフィアが述べたことから推し量り、提案する。

「その侵入者さえ掴む糸口があれば、心配はないと」

「はい」

グローリフィアは深く首肯しゅけんし応じる。

「ですが 現状はあまりよろしくありませんね」

自分の力が及およばなかったことから、申し訳なく思うフランソワーズは視線を地面に落としそうになった。

「それでは、その足跡を追ってみましょうかあ」

突然、グローリフィアが言い出したことに、フランソワーズは訳も分からず、はっとグローリフィアに目をやった。

「侵入者が逃げた経路を辿ると何か見つかるかもしれないね」

グローリフィアは、にこりとした顔でまじまじと自分を見つめるフランソワーズに言い掛かけた。

もう頭の中がクエツチョンマークだらけのフランソワーズは、その場に棒立ちするしかなかった。

「早速さっそく 行きましようかあ」

グローリフィアの投げ掛けに、フランソワーズは慌てて、事情を確認した。

「ちよっ、ちよっと待って下さい姫様、一体どうやって追いかけるのですか？」

あっ、忘れてた、と言わんばかりにグローリフィアは質問に応じる。

「この部屋から城外じよふがいへと繋つながる通路があります。侵入者はきつとそこを使つたに違いありません。ですので、今から調べに行ゆきましょ

「う

フランスワーズはその考えに頷けたが、王女が直々（じきじき）に赴くことには賛成できなかった。

「姫様、それは少々危ないのではないかと存じます」

「いえ、私が行かなければ道もわからないでしょう」

フランスワーズの心配を余所に、グローリフィアは珍しく反対の意見を述べた。

グローリフィアの身の安全を第一に想うフランスワーズは、頑なに閉口して対抗する。

二人の間で軽い不和が生じたと思ったのも束の間、

「この国を守るのに立場など関係ありません 私は私の意志を貫きたいのです」

グローリフィアの最後の押しにより、フランスワーズの固い口が緩んだ。

「わかりました」

この情熱的な性格は、亡き国王オウラム・ガネットを彷彿とさせると思い、フランスワーズは口元を僅かに綻ばした。

「では 行きましょう」

そう言って、グローリフィアは机の真下にあるタイル状の床を取り外し、フランスワーズに説明する。

「ここから降りるのです」

フランスワーズは、床に膝を突いているグローリフィアを見て、咄嗟に動いた。

「姫様 ここは私にお任せ下さい」

ここまで言い掛けてくれるのは、きっと信頼されている証。そう思ったフランスワーズは息込んでいた。

勢い付いたフランスワーズは止められないと知っているグローリフィアは、快く譲った。

「わかりました」

フランスワーズは、グローリフィアからランタンを受け取り、

「先に参ります」

意を決して、穴の中へと潜り込む。

続いて、グローリアフィアもひらりと身を入れて行った。

グローリアフィアとフランソワーズは隠し通路に進入する。

昼下がり。

話し込んで小腹が空いたので、僕とルドルフはタコスを頬張^{ほちほ}っていた。

創立祭といえはやはりこれだ。タコスは肉と野菜のバランスが取れていて、しかも手に持ちやすい。童心に帰った僕らはシビックに通っていた頃の話をしていた。

「今思うと あの頃はよくバカをやったよなあ」

「はははっ、と笑い耽^{ふけ}るルドルフ。」

「そうかなあ」

僕はそうでもなかったが、ルドルフから見ればそう写ったんだろう。

ルドルフはシビックにいるのが不思議なぐらい頭が良く、運動神経が良かった。だから、僕は付いていくのがやっとだったと思う。

それは、今も変わらない。

僕はいつも誰かの背中を追い続けている。ルドルフや父さんや姉さん、そして昨日の少女。

「だけど、いつも追いつけず仕舞^{しまい}。」

「でもさあ、なんで急に騎士団を目指すって言い出したんだ？」

ルドルフが、僕に話を振った。

「それは……強くなりたいたいからかなあ」

僕はちよつと言うのが億劫^{おっくう}だったが、正直に打ち明けた。

「そうかあ」

ルドルフは斜めから差し込む陽光^{よしみつ}に目を細めながら、頷^{うなず}き、「ところでさっきのは何だったんだ？」

真面目な顔をして訊^きいてきた。

「昨日の少女が居ただ」

僕はその質問に素直に答えた。

ルドルフは軽く笑みを浮かばせ、面白そうな顔をしている。

「その少女とは知り合いなのかあ？」

「いやあ」

僕はどう答えるべきか分からず困ったが、何とか分かるように簡短に纏めてみた。

「たまたま会って話をしただけだよ」

「たまたまねえ」

ルドルフが含み笑いをしながら、意味深な事を言ってきた。

「その偶然っていうのが怪しいんだよ」

「へっ？」

思わず、訊き返した僕にルドルフは説明する。

「だから 偶然なんていうのはありえないんだよ 生きること死ぬことも この世界では全てが必然だ」

まだ無知な僕は、その時ルドルフの言っていることの意味が理解できなかった。

騎士団の団員として厳しい経験を積んでいるルドルフと違って、何となく過ごしてきた僕には到底分かるはずもないことだった。

どう埋め合わせても届くことのない歴然とした距離感を感じながら、僕は苦し紛れだが、その差が一步でも埋まるように努めた。

「そうなのかなあ」

僕はルドルフの大言を真に受けて考え込んでいた、しかし。

「そうだ それはきつと運命ってやつだあ」

肩透かしのようにルドルフは笑い飛ばした。

「っ、えっ!?!」

身を仰け反る程の驚きに、心の中の独り言が漏れて出してしまう。(なんだよそりゃ、真剣に考えてた僕がばかみたいじゃないかあ)

「へへへ、驚いたかあ」

やってのけたような風をして、ルドルフが込み上げた笑みを溢れ出させた。

「んふふ」

その勢いに釣られ、僕も笑い出してしまった。

「はっはっはっ」お腹に手を当てながら、笑い声を上げるルドルフと
「ははは ははっ」それを見て、可笑しいと思う僕は

変なスイッチが入ってしまい、どうしてか笑いが止まらなくなっ
た。

一頻り笑い倒けた後、ふと遠くの空に目を移す。

気づけば、西の空が朱く染まっていた。上空に浮かぶ夕雲がうね
うねと川のように流れている。

静穏な空気は、時間を舞い戻すような刹那を運び、僕は呼び戻さ
れるように思い返った。

まさかなあ

ゲホツ、ゲホツ フランソワーズは、口に握り拳を当て咳き込み、
言い掛け、

「姫様」

ンフツ、ンフツ グローリフィアは、上品に両手で口を包み込む
ように息を整えて、応える。

「ばあや」

自室に帰ってきたグローリフィアとフランソワーズは、暗闇の閉
塞感から解放され、安堵し、胸の中の詰まった空気を清浄にするよ
うに軽く息継ぎをした。

「よもや このような抜け道が存在するとは 思ってもみませんで
した」

胸に両手を当て、肩で息をしながら、フランソワーズは心中を零
した。

逸早く平静に戻ったグローリフィアは、それに同調する。

「はい 私も初めて伺いましたので同じ思いです」

窓から差し込む陽光は赤々（あかあか）として、室内の壁に二つ
のシルエットを浮かばせる。

瞳に入り込む朱い光線が眼球をなぞるように当たり、グローリフ
ィアは気付かされた。

もうこんなに時間が過ぎてたんですね

そう思いながら、傍らで疲れた風に立っているフランソワーズを
見て、

随分と長い間巡っていたみたいですよ

グローリフィアは、今まで来た道のりを思い返す。

床の下から垂直に伸びる鉄梯子を伝って2メートル程下りると、
段差のある地面に足が付いた。固くて頑丈そうな石でできた足場だ

った。

フランソワーズの持つ灯りが壁面の場所を照らし出し、丸みの帯びた空間が現れた。察するに、ここは自室の隣にある尖塔の中だろうとグロリーフィアは思った。今までは、ただのアンティークな飾りだと認識していたグロリーフィアは、父上の考えそうなことだと簡単に腑に落ちることができた。

階段が反時計周りに螺旋を成して下方に回っている。その真ん中には黒い穴がある。一体どのくらい深い穴なのか、その黒の濃さから相当のものと捉えたグロリーフィアは、背筋が少しだけ寒くなっ

た。
一通り現状を確かめた後、

「下りましょう」

グロリーフィアは不安になりそうなのを制し、フランソワーズに凜々（りり）しく呼びかけた。

僅かな間を置いて、

「はい」と硬い声で返答が来た。

グロリーフィアと同様にフランソワーズも、穴の奥の深さに慄いていたみたいで、身を強張らしていた。

そこから気を取り直して、意気込むフランソワーズを先頭に、ぐるぐると目が回りそうな螺旋階段をひたすらに下った。慎重に足元を確かめながら、確実に足を一つ前の段に出す事を繰り返し、何十週か回った。

もうどれくらい同じ周回を経たのだろう、そう溜息をつきそうになった時、光の先端の景色に今までと違う材質の地面が写った。

心なしかほつとするグロリーフィアとフランソワーズは、平らな地面の上に足を踏み入れた。

すると、灯りは3〜4メートル先の壁面へとぶつかかった。

息を凝らして、音を立てぬよう静かに歩み寄る度に伝わってくる壁の重厚感。

近付くと、壁には何かの模様が描かれているようだ。

咄嗟に見た陰影から、おそらく絵だろつとグローリフィアは予想した。

フランソワーズは即座にその気配を察知し、壁画の全体を窺えるように一歩退いて、灯りを顔の手前に翳す。

温かい橙の灯に照らされ、浮かび上がったのは、右方に太陽と山、左方に満月と森、上方に壮大な草原、そして真ん中には、家々が並ぶ大きな街。

配色は二色で、真ん中の街を境に右側を黄土色、左側を白に塗り分けられている。

「この絵は……」

眉を顰めるフランソワーズの口から、つい零れ落ちた疑問。

側にいるグローリフィアの耳にも届いたが、王女は特に気に掛けることもなく壁面に意識を集中させた。

太陽と月、陽と陰。上方に写る平原と左右の森と山という地形から、真ん中にあるのは、ガーネット王国だと類推するグローリフィア。

これは、おそらく何らかの暗号。

そう解釈し、考えを捻る……のだが、

どうしましょうかあ　ここを抜けなければ、先に行けそうにもありませんね

良い案が浮かばず、グローリフィアは行き詰まってしまった。

そんな困窮しているグローリフィアに、フランソワーズが心配を寄せる。

「姫様　如何でしょうか？」

「ええ」

グローリフィアは集中しているため、頷くのが精一杯だった。

大きな壁の前で中々先に進めず、時間だけが過ぎる。

気づけば、二人の額からは微かな汗が浮かんでいる。どうしても解けない謎にグローリフィアは、くつと奥歯で歯噛みをした。

これから先にどのような道が続いているのか分からないため、いつまでも踏み留まっている訳にはいけない。全力を尽くしたが、自分

では歯が立たなかつた。グローリフィアは、あきらめて戻ることにした。

「ばあや」

隣で確と待つていたフランソワーズの耳に、グローリフィアの悔しさを抑えた声が届いた。

姫様

その声色から大体の心境を悟ったフランソワーズは、残念な気持ちを抑えて、明るく返事をしようとした。

「はい」

グローリフィアは僅かに俯き、潔くも悲観的に打ち明ける。

「私では力不足でした」

フランソワーズも同じように、何の力添えもできなかったことを悔やみながら、慎む深く受け止める。

「然様でございますか」

グローリフィアが踵を返し、

「帰りましょう」

短く伝えて、

「はい」

フランソワーズは小さく返事をし、不安定な気持ちのまま帰りも自分が前に立ち、先導しようとして歩き出そうとした。

っ

声を詰まらせたフランソワーズ。

その直後に。

パリーン、とガラスの割れる音が足元から聞こえた。

そして、辺りは暗闇に包まれた。

突然の変化に言葉を失う二人。

「申し訳ありません」

遅れながら、自分のミスに気付き、慌てて声を上げるフランソワーズ。

まだ、暗さに目が慣れていないグローリフィアは反応をするのに

少々時間がかかった。

「ええ 大丈夫です」

目が慣れ始めたが、全く外の光が入り込まない空間にいる中では何も視認できるものはなかった。

胸の中に圧迫が襲い、飲み込まれそうになるところを堪え、

「ばあやは何事もありませんか？」

フランソワーズを気遣うグローリフィア。

「はい 何とか ですが……」

返事をする途中で心落ちするフランソワーズ。

二人は通路の最下層部で、身動きが取れなくなってしまった。

窮地に立たされたグローリフィアは、何とかこの苦境を打破しようと暗中模索した。

ここから上階まではかなり距離がある。だが、壁伝いに行けば何とか生還できるだろう。

もう本当に散々（さんざん）な結果になってしまったなあと、こんな冒険みたいなことをしてしまったことを後悔しながら、未練がましく、行く手を阻んでいた重厚な壁を顧みた。

（えっ？）

グローリフィアは自分の目を疑いたくなくなった。

見れば、微かに赤く発光している。

ちようど絵の中心に位置する街。

ガーネット王国が。

「魔石」

グローリフィアの口からポツリと零れた一言。

昔、ガーネット王国の東に据わる鉾山で採掘されたといわれる石に基づく逸話中の逸話。

城が厳重に保管している史書にだけ記された稀有な事項。

「その怪しき光は人を狂わせた。何かに取りつかれたように人々は我を失い、だれもが我が物にしようとは他者を排除しようとした。争

いの中、魔石は街に持ち込まれ、混乱は街中に広がり、家屋は破壊され、王国民は狂乱に陥った。

城の者ではその暴動を鎮静することもできず、為す術もなく頭を抱えるだけだった。

そうしている内に、城内にも波は押し寄せてきた。

城内は騒然とし、逃げ惑う者と狂騒する者が入り混じれ、この国の存亡自体も危ぶまれた。

崖っぷちに立たされたガーネット王国。

誰もがもうダメだとあきらめかけた。

しかし、突如として混乱は終結した。

何の前兆もなしに、ぴたりと。

我に返った人々は自分の身の周りを見て、愕然とした。

損壊した建造物は、街の半分に上り、復興までには多大な時間を

要したと言われている。

後に、妙な噂が囁かれた。

「この国は何者かに救われた」と。

錯乱状態の中、一部の者はその存在を目にしていた。

金色の髪の屈強な大男を。

人間ではありえない速さで疾駆した、木を飛び越える程の跳躍を

有した、など様々な目撃談が轟き合い、憶測は憶測を呼んだ。

誰も記憶が曖昧だったため、伝説の英雄が舞い戻って来たとい

うことで落ち着いた。

ガーネット建国に関わったとされる名前も無い英雄。

そんな人は初めから居なかったのかもしれない。誰かが想像した

偶像なのかもしれない。

だからこそ、人々は未だに正体の知らない者に頼りを寄せたのだ

ろつ。

こうして、魔石事件はガーネット王国最大の惨事という形でそれ

ぞれの胸に秘められた。

□

頭の中に史書ししょの中身を浮かび上げたグローリフィアは、近くで気配を感じるフランソワーズに新たな発見を告げようとする。

「ばあや」

「はい」

フランソワーズの返答が来るとすぐに、グローリフィアは意気揚々と伝える。

「吉報きつほうです」

「んっ！」

咄嗟とつさに声を出して驚くフランソワーズに、グローリフィアは続けて述べる。

「壁の方をご覧になってみてください」

促うながされ、ゆっくりと体を壁の方へと向けるフランソワーズ。

！

目に飛び込んできた淡い輝あわきに、はっとし、グローリフィアに確かめるように伺うかがう。

「あちらの光は何でございますか」

件の事件くだんのことを表立おもてだてしたくないと思うグローリフィアは、

「あちらは鉱石こうせきの一種です」

詳細を伏ふせて説明した。

不思議な現象を目の前にし、フランソワーズは返す言葉もなく黙ってしまった。

光を放つ石など聞いたこともありません

自問をして、心を整えようとするフランソワーズ。

グロリーフィアは、フランソワーズの気持ちの準備ができるまで、暫しばし呼吸を置いてから自分の推測を示す。

「きっと あちらの部分に何かの仕掛けはかいが施せいしてあるのだと思いま
す」

「はい」

フランソワーズは自分を納得させ終わり、俄にわかに芯しんの通った目になつた。

「やっと鍵なるものを見つけました」

そう言つて、グローリアフィアは再び壁に近付く。

もうランタンはないが、壁にある光に目掛けて、確実に進んでいく二人。

壁の間近に寄ると、はつきりとその実体を目にすることができた。

二人の瞳に赤い粒が写し出される。

壁の中央に埋め込まれた赤い石。

よくよく見てみると、ちょうど街の真ん中にある部分に潜んでいた。

本当に立派な細工ですね 父上

仕掛けの糸口を目前に確信し、グローリアフィアは自分の父上を称賛した。

そうして、平坦な壁に描かれた城にグローリアフィアの上品な手が伸びる。

赤い石の光を覆うように、グローリアフィアの一指し指と中指が光源に付き、みるみる内に中に押し込んでいく。

その光景を隣でこれ以上にならない真剣な顔で見つめるフランソワーズが、緊張と高揚の余り息を呑んだ。

すると。

ガコン、と分厚い壁の奥から、歯車が回るような機械的な音が響いた。

その音を聞き、グローリアフィアが壁から指を優しく離した。

指を引き終えた直後。

今まで堅く閉ざし、道を阻んでいた強固な壁が色と色の境だった中央の線から左右にゆっくりとスライドしていった。

ガコン、という音と共に人が一人入れる位のスペースを残し、壁は停止した。

少しだけ開かれた空間に目をやるグローリアフィア。奥には小さく赤い点がちらほら見える。

グローリアフィアは、躊躇うこともなく足を踏み入れた。その後にはフランソワーズも続いた。

左右の壁の下部に、赤い石が据えられている。

二人は鬱積した抑圧から解放され、勢いのまま一気に進んでいった。

急ぎ足で突き進む視界の両端に、5メートル置きの間隔に赤い石が瞳を輪郭線になぞっては過ぎる。

100メートルぐらい一直線に進むと、両端の光は途切れ、正面に小さな光が浮かんでいた。

またですかあ

グローリフィアは、胸の中で零した。

目の前には、先程と同じように重厚な壁がある。

グローリフィアは、迷わずに中央にある赤い光を押し込んだ。

ググン、と壁がのっしりと横に動く。

それに伴い、右端の方から薄く暖かな光が差し込んできた。

(太陽)

グローリフィアは涙くみそうになった。

だが、まだ気が早いと思い、光の射す方へと足を進める。

壁を抜ける時に目がちかちかしたが、それでもグローリフィアは手を額に翳しながら歩むことを止めなかった。

目が慣れ、最初に写ったのは大部分が色褪せた白の煉瓦。六畳ほどの空間を上下左右囲んでいる。足元には使い捨てられたランタンがある。そして、正面にある壁の右端から縦に光の筋が浮かんでいる。

グローリフィアは今までの肩の荷がどっさりと取れていくのを感じながら、煉瓦の壁に手を伸ばす。

フランソワーズも目を丸くしながら、ただ王女の行く方に付いていく。

光が放出されている隙間に手を入れたグローリフィアは、慎重に壁を左に押した。

ゴロツ、と石と石が擦れる音を耳にしながら、グローリフィアは手の拳程度開いた穴に片目を近づけて覗いた。

見たのは鬱蒼と生えた木や草と灰色の石坂。

城外ですか

グローリフィアは目に入った情景から推測を立て、フランソワズに話かける。

「ばあや 見てみてください」

後ろでひっそりとしていたフランソワズは速やかに返事をし、

「はい」

隙間から外を覗きながら、おもむろに感想を述べた。

ここは

「城外でしょうか」

グローリフィアは丁寧に応じ、

「はい 私もそう思います」

自分の見解をすらすらと上げる。

「おそらく 手前にチエリー樹がありましたから あちらの坂はチエリー坂でしょう 傾斜からして城下街に近いところだと思います」
フランソワズは真剣に聞き入り、件の侵入者の逃亡経路を推し量る。

「それでは ここから逃げ出したと？」

「ええ、間違いないでしょう」

グローリフィアは同調するように答え、ため息混じりに言った。

「恐ろしい洞察力ですね」

一呼吸置いてから、グローリフィアは足元に置いてある使い捨てのランタンに視線を向けた。

「あちらのランタンは使えそうでしょうか？」

グローリフィアが訊ね、フランソワズは迅速に動く。

「お待ちください」

そう言い、ランタンへと近づいたフランソワズは両手で持ち上げ、状態を確かめる。

鋭い目がランタンを舐め回す。

まだ微かに油が残っており、持ってきたランタンから油を入れ

ば、事なきを得そうだ。

「使えそうです」

僅かにほっとしたフランソワーズは現状を伝えた。

「では、帰りましょう」

グローリフィアが顔を引き締め、言い出すとフランソワーズはポケットからマッチを取り出し、ランタンに火を点け、二人は来た道へと戻った。

大変でした

胸を撫で下ろし、グローリフィアは自室から夕食に向かおうとしていた。

部屋には、側近のヴィオラが迎えに来てくれている。

全く一時はどうなることかと思いましたが

アンティークな椅子から立ち上がり、何故か胸がワクワクしているグローリフィアだった。

ガーネット王国の西に広がる広大な森には木々が群集し、一面が緑色に埋め尽くされている。或る理由のため、人間が容易に足を踏み入れることが少ないこの地には、動物や魚などが数多く生息している。長年により阻害されることなく繁殖しているため、未知なる生物が存在するといわれている。その中の代表として扱われている獣人達。彼らは、森に害を為す者を決して許さない。森の入り口付近では穏やかだが、奥地に進むに連れて執拗に攻撃をしてくるといふ噂がある。

そんな謎に包まれている森林で。

日が沈みかけ、暗くなり始めた森の中を少女は気分良く歩いていた。

茶色に近い金髪を肩まで流し、小さな顔の中で円らな瞳が輝いている。胸と腰にはベージュの布を巻いて、細い木の皮が網状に足を覆うような靴を履いている。

木々の合間を通り、獣道のような細い分け目を進んでいる少女。

そこに、

「んっ チャステイ」

横合いから、どこからともなく聞こえてきた野太い声。

声のした方を向くと、茂みから悠々（ゆうゆう）と身体を覗かせる黒い巨体と目が合った。

全身が黒い毛で覆われ、緑のラガーシャツとカーキ色の半ズボンから、屈強な肢体が伸びている。二本の尖った角を頭に生やした威めしい顔付きの長身巨漢。

目の前を通りがかった見慣れた顔に気付き、呼びかけたのは牛の

黒毛魔獣。

巨体はクンクンと鼻をひくつかせ、チャステイと呼ばれた少女に問いかける。

「おめえ 人間臭くないかあ」

黒毛魔牛くろまごまぎゅうから訊きかれて、チャステイは頭の後ろで手を組み、呑気のんきに返す。

「あゝ さつき ぶらつと散歩してきたの」

「好奇心おうしん旺盛せいなものいいが あんまり奴らに近づくと危ねえぞ」

念入りに訴えかける牛魔獣。

「わかつてる」

チャステイは内心鬱陶うつとうしいと思うのを堪こえて、愛想よく答えた。

言い終わってから、間髪かんぱつも入れずに、

「そうですよ」

木の陰からふらりと別の者が現れた。

黒っぽいスーツに身を包んだ紳士風な長身瘦軀そつく。青のネクタイで

きつちりと締められた襟えりからは、ほっそりとした顔が出ており、毛

並は白赤色しろあかをしている。頭に二本の曲がった角を伸ばしたポーカー

フェイスの牛魔獣。

こちらに静かに歩み寄りながら、赤毛魔牛あかげまごまぎゅうは恭まことしく話しかけてくる。

「チャステイさん、油断は禁物。危ないものには近づかないのが得策とくさくです」

「あつ、バルクンテッィヒ」

チャステイは、間の抜けた声で反応した。

「はい」

首を軽く縦に振り頷うなずくバルクンテッィヒは話を続ける。

「奴らは己おのが欲ほに憑とりつかれた鬼なのです。例え我ら獣人じゆうじんと言えど、隙すきを突かれれば元もこうもありません」

その言い様に引つ掛かった黒毛魔獣は、突っ込みを入れる。

「バルクン、 おめえはいつも饒舌じょうぜつが過ぎるんだよ」

変な言い掛かりをつけられ、

「あれ、あなたも居たのですか？ フォルケンブルク」

バルクンテッィヒは、素っ気なく対応した。

フォルケンブルクはすぐに答え、

「当たり前だよ」

自分の意見を主張する。

「んなことより、俺らが奴らに負けるなんて聞き捨てならねえなあ」
バルクンティツヒは顎に手を添え、

「あなたも一度手を合わしているのですからご存じでしょう」

冷静に語り、一呼吸した後、

「彼らの残忍さを」

感情の込められた言葉を口に出した。

「つち ああ」

舌打ちをし、苦々（にがにが）しく頷くフォルケンブルク。

脳裏にちらりと凄惨な過去を浮かばせ、沸いてくる怒りを抑えながら、バルクンティイヒは言葉強く言う。

「いかなる手段を持ちいても我らを滅そうとした。この森に火を付けてまで」

「分かってるよ」

視線を微かに横に落とし、キレ気味の口調で息づくフォルケン。

強いられた残忍な凶行を確かめるように、バルクンティツヒは真っ直ぐな姿勢で問う。

「以後、彼らを“イゴズ（自我の）オーツ（くず）”なる異名を名付けた所以でもあります。お忘れになりましたか？」

ただでも怖い顔付きのフォルケンブルクは眉を顰め、さらに威圧的な顰めっ面になりつつ、

「いちいち蒸し返すんじゃないよ。胸糞悪い。あの時は油断してただけだってんだぜ。そもそも俺らとオーツを同じに比べるってのが

おかしいんだろがよう だから

長つたらしく弁明をしようとした。

フォルケンブルクが最後まで言い終わる前に語尾を覆つように、
バルクンティツヒが素早く、チャステイに告げる。

「それよりも長老がお呼びですよ」

「おいつ」

聞いてんのかよ、と真面目な顔を崩し、漏らすフォルケンブルク。「そうだね」とチャステイが明るく返事をする、

バルクンティツヒとチャステイは、森の奥へと歩き始めた。

言いたいことはたくさんあったが、フォルケンブルクは仕方なく二人の後を付いていった。

木々の合間をすり抜けて、一行は森の中心にある大樹へと向かう。道すがら、見知った顔に出会って足を止めた。

草を踏みしめるこちらの足音に気付いた相手は、振り返り様に声を掛けてきた。

「あつ チャステイじゃない」

呼ばれたチャステイは軽快に挨拶する。

「ああ ミニリツチ」

「久しぶりね」

キュートに返事するのは、パチリと開いた赤い目が爛々（らんらん）と輝く白い毛皮のバニーガール。機嫌が良いみたいなのか、耳がピンと伸びている。

「そだね」

相槌あいづちを打つチャステイは投げ掛けられた言葉が外れていると感じ、突っ込みを入れる。

「……ってこの前も会ったよ」

「ええっ そうだっけ！」

口を手で覆い、慌てて驚く天然なミニリツチ。

チャステイは鬱陶うつとうしがることなく、調子よく合わせる。

「そうだよ」

出会い頭に楽しげに話を繰り広げる二人。

その会話を後ろから聞いていたフォルケンブルクは、「ツミ、ミニちゃん」と目がハートマークになっている。

そんなフォルケンブルクの横から出て来たバルクンティイヒは、ミニリツチに礼儀良く訊ねる。

「ところであなたも大樹へと向かうところですか？」

「そう 私もこれから行くところなの」

視線をチャステイからバルクンティツヒに移し、ミニリツチはやんわりとした声音で返した。

そう聞いて、都合がいいと思ったバルクンティツヒは、ミニリツチを紳士的な態度で同行するように誘う。

「そうですね、ならちようどいい。ご一緒に参りましょう」

「ええっ」

何も考えることなく、すぐに了承したミニリツチ。

その円滑な話の運びが気に食わなかったフォルケンブルクは、羨ましそうに不平を漏らす。

「抜け駆けしてんじゃねえよ、バルクン」

聞こえていたか、聞こえていなかったか、定かではないがバルクンティツヒは、構わずにミニリツチを誘導しようとする。

「さあ 荒くれ者は放っておいて行きましょう」

また置いてけぼりを食らったフォルケンブルクは、悔しそうな顔で呻く。

「つちよ、待てよ、畜生（泣） バルクンの奴めえ」

泣き言を言いながら、フォルケンブルクは仲間の後を追いかけていった。

天辺が見えぬ程の大木が乱立する中、一際巨大な大樹が在る。

空を覆うように伸びた枝や葉が傘のように広がり、大地から伸びた壮大な幹は雲間を突き抜けていきそうな錯覚を覚える。

森の中心に着いた一行は、地面から波打つ脈のように隆起している根の手前で足を止めた。

もう日は沈んでしまい、辺りは薄暗い。

急ぎ足で向かって来たため、一行は疲れた足を休めていた。

すると、大樹の側にあるそこそこに太い木の方から、舌打ちと共に漏れ聞こえてきた文句。

「チツ、おめえら遅いんだよ」

耳をピクリと動かし、音源を感知したフォルケンブルクは、声のした方角を向き、体相良く詫びを入れる。

「わつ、悪いなあ、ホーナー」

そう言い、歩き出すフォルケンブルク。その後をチャステイ、ミニリツチ、バルクンティツヒの順に続いた。

太い幹には、木の外皮をそのままくり抜いた薄い線が入っている。上辺は半円を描き、そのまま真っ直ぐ下り、底辺に四角を作っている。

顔の高さに丸い覗き口があり、中から薄っすらと黄色い光が零れている。

フォルケンブルクは手慣れた様子で、腰辺りの高さから横に伸びた木の枝を掴み、手前に引く。

木の扉が開けられると、待ち構えていたのは待ちくたびれた様子の面。

堅硬な二本足で体を支え、フォルケンブルクよりも頭一つ大きい2メートルを超える長軀。

頭から頑丈そうな一本の角を生やし、白の半袖ワイシャツと半ズボンを身に付けた灰色の毛並の馬獣。彫の深い面長な顔をしており、誇らしげな表情が心なしか気障つたらしく見える。

「レグレオ様、これで全員揃いました」

馬獣ホーナーが奥の方に語調を整え、畏まって伝えた。直ぐ様、「んっ」と重々（おもおも）しい頷きがあった。

その返事を受け、一行は木の幹の中へと入って行く。

丸い円状に木の皮で囲まれた小ぢんまりとした空間。天井はホーナーの角が突つかかる心配もない位の高さを有している安心の造り。中央には楕円形の分厚い木の机が置かれ、丸太の椅子が周りに並べ

られている。

室内を淡い光で満たしているのは、机の真ん中や木の皮の窪みに取り付けられている丸い珠。両手で抱えられる程の大きさをしており、まるで生きているかのように内部から黄色の光を発している。

全員がそれぞれの席に着くと、上座（部屋の一番奥の席）から堅固な声は聞こえてきた。

「よし、誰も欠けておらぬなあ」

皆はその声に応じ、目を向ける。

視線の先には、背もたれと肘掛けに象形文字のような装飾が施された椅子に、のっしりと腰を据えている金色のライオン。全体的に黄色の毛並みをし、鬘部分は金に輝いている。顎に豊富な髭を蓄え、金の粒子が輝く橙のベストを着込んでいる巨軀。勇ましい雰囲気満ちた獅子、レグレオ。

確認を終え、獅子はおもむろに語り始める。

「皆も知つての通りと思うのだが、ここ最近悪い気が流れ込んでおる。不吉な渦が」

皆は黙って、獅子の言葉に集中している。

「よって、治まるまで森の警護を固めることにする」

獅子は、集まったそれぞれの者達に目を移し、役目を言い渡す。

「ホーナーは人の立ち入らぬよう、日向かし（東）を」

馬獣は澄ました顔で答える。

「はい」

「バルクンティツヒは念を入れ、去にし（西）を」

魔牛は、紳士らしく首肯する。

「はい」

獅子は二体と見合って、付け足す。

「二君には外敵の警備を行ってもらおう」

獅子は息を軽く吸い、次の相手に移る。

「フォルケンブルクは 神木の周りの守護を」

牛魔は力強く返答する。

『はい』

「チャステイとミニリッチは、もしも網を掻い潜り入り込む者が現れた場合に備え、森の中を見回してもらおう」

チャステイとミニリッチは声を合わせ、透き通った声で受諾する。

『はい』

獅子は温和的な二君を氣遣い、

「何かあれば、すぐに近くの者に伝えてくれればいいじゃろう」
補足し、続いて決まり文句を述べる。

「誇り高つ、」

「はいっ」

話を覆い被さって、レグレオの言葉を途中で制止した真つ直ぐな返事。

勢いが途切れたレグレオは、すぐに発言者に注意をする。

「バルクンティヒ」

顔色も変えず、一本角の生えた馬獣は、すんなりと畏まって謝る。

「失礼しました」

悪気があるように見えなかったので、

「まあ良い」

レグレオは快く受け、気を取り直してもう一度言い直す。

「誇り高き我ら“サグラド”がこの森を守るのじゃ」

今度はすつきりと決められたレグレオは、最後に心地よく仲間の身を案ずる。

「皆の者、十分に気を付けて事にかかるように」

野太く、礼儀正しく、誇らしく、柔らかく、可愛らしく、それぞれ
の語調で一斉に、

『はい』と声が上がリ、森の集会は閉幕した。

集会を終え、神木の下には大小のシルエットが佇んでいた。
「チャステイよ」

巨^{きよ}軀^くの獅子は、自分の身体の半分位の小さな相手へと話しかけた。
「んっ」

呼ばれたチャステイは、神木に新しい光が宿^{やど}っていないか、見上げていた首を下^{おろ}し、獅子の両手に携^{たずさ}えられた光る実を見入りながら応答した。

他の者は、早々（はやばや）と自分の塹（ねぐら）に帰って行った。

今ここにいるのはレグレオとチャステイのみ。

予言

レグレオの胸の内には話さなければいけない事があつた。

レグレオは誰も邪魔が入らないこの期を見計^{みはか}らつてチャステイに告げる。

「近づいておる」

意味深な言葉を。

「運命が」

言い終わり、遠くを見つめるレグレオ。

神木とその周りの樹木の高低差によつてできたパノラマから夜空^{のそ}が覗^{のぞ}いていた。

今宵^{こよひ}の月は赤みがかつた三日月。鋭利^{えいり}に尖^{とが}つた刃物を思わせる。
瞼^{まぶた}から零^{こぼ}れる月光は朱^{あか}き血の涙。

罪の色。

地平線に浮かぶ雲を押しつけて不気味に夜空に垂れ下がっていた。

ガーネット王国から北に延びる壮大なグリーンズウェル平原をまたいで建立している大国、ノルワード公国”。

断崖から切り立つように聳える砦の中の一室で怪しげな会話が交わされていた。縦長の窓から月明りが射し込み、二つの影がブロツク目の床に伸びている。

「こちらでございます」

抑揚のない平らかな声と同時に、影が動く。

丸く包められた紙面を差し出す若き青年はやや無表情な目をして
いる。

白いローブを着た男はその紙束を大切そうに受け取り、丁寧な口調で事の成果を褒め上げる。

「ご苦労でした。これでまた理想に大きく近づきました」

そう言い、手渡された文書を静かに開き、目を通す。

男はざっと読み終えると、窓の外に目を移し、遠くに写る地平線と空が重なる境を見ながら小さく零した。

「あの森ですかあ」

窓辺に向いた顔が月の光に紅く照らされて

騎士団試験

数日後。

「それじゃあ、行ってきます」

試験は休日を利用して行われた。

僕は朝早くから起きて、正午から始まる試験に合わせて心の準備をしていた。

だから、余裕を持って臨むつもりだった。

僕が城の正門に着いた時には既に正装に身を包んだ従者が待ち構えていた。

「お待ちしておりました」

細身な身体にオレンジのローブをびったりと着込んだ見目麗しい女の人が軽く会釈をして、真っ直ぐに案内してくれた。

城内のエントランスの大きさは通路に敷かれた絨毯の輝きに圧倒されながら辿り着いたのは控え室。

「こちらで御座います」

品良く告げ、従者の方はまた来た道に戻って行った。

部屋の中には左右に四脚椅子が内側に向いて整列し、正面に扉が設けられている。

他にも志願している人がいるだろうと睨んでいた僕は、室内に誰も居ないことに軽く拍子抜けした。

それでも心は普段味わうことのない高貴な雰囲気^のに呑まれたまま、僕は左端の前席に腰を掛けて呼ばれるのを待った。

じっと待っていると、奥の部屋から厳かな空気が壁伝いに肌を締め付けてきた。

僕は息を整え、平静を保つように心掛けようと大きく息を吸い、深呼吸をしようとした。

その時。

「アモル・ウイレンス」

出し抜けに名前を呼ばれ、一瞬息を呑み、

「はい」

僕は反射的に快活な声を上げ、椅子からむくと立ち上がった。

続けて、

「入りなさい」

扉の向こう側から堅い声が聞こえたので、僕は扉の前で直立し、

コン、コン、と礼儀良くノックし、

「失礼します」

奥の部屋に入室した。

すぐに視界に入ったのは長机の席に座った審査官が三人。真ん中に銀縁の眼鏡をかけた堅固そうな女性と両端には赤いローブに身を包んだ渋い男。審査官の視線の先には四脚椅子が畏まっているように据えられている。

部屋の敷居を越えた途端、心臓がぐんと胸を叩いた。

張りつめた空気に圧されて、僕は速やかに扉を閉め、一礼を入れる。

御辞儀を終え、怖そうな女の人と目が合ったと思うと、

「それでは早速始めます。席に着いてください」

こちらに指示が送られた。

僕は椅子へと真つ直ぐに歩き、もう一度礼をしてから席に着いた。

ふーん 鼻から息を短く吐き、真ん中の面接官は記述した用紙を見ながら、確認するように言う。

「アモル・ウイレンス、16歳」

「はい」

「はい、それでは志願した理由は？」

僕の返事を軽く受け止め、女官は単刀直入に訊いてきた。

僕はほんの一瞬躊躇したが、思い切っておりそのままを口に出した。

「強くなりたいたいです」

「強くなりたいたいと……」

真剣な顔で考える女官は、ふと言い出す。

「『強さ』とは時にその意味を履き違えるものです」

落ち着いた口調で答えを導くように語りかける堅硬な瞳。

導かれたように僕は心の奥にある素の気持ちを表出させる。

「変えたいんです 今までの自分を」

「うん、そうですね」

女官は素直な調子で合わせ、そっと投げかける。

「それは何のためですか？」

その言葉運びは真意を説こうとしているようで、

「守りたんです、この国を」

何故だか自然と僕の口から意志が呼び起された。

「よし、分かりました」

女官は納得がいったような顔で深く承諾し、

「以上です」

はつきりと述べると共に騎士団の試験は締められた。

創立祭の慌ただしさから、元の平穩な日々に戻りつつあるガーネツト王国。

黄金の斜光を浴び、映々（ばえ）しく中心に建つガーネット城。その一室で不気味な笑みを浮かべる女が居た。

んふふ、最高じゃないの

壁一面に張られた巨大な鏡の前に立ち、あれよこれよと体をくねらせて、ポーズを決めている若い女。青い髪がスルリと肩甲骨辺りまで伸び、軽装ながら手足には甲冑がしてある。豊満な曲線美から繰り出される鮮やかな四肢は程よい筋肉が付いて締まっており、尚しなやかさを増す。

女はクルリと体軀を回し、背中越しに二度、鏡に写る我が身を見る。

本当見惚れちゃうわ

我を忘れ、若い女は自分の美しさに夢中になっていた　とそこに、

トン、トン、と扉をノックする者が訪れた。

「失礼します」

扉の向こうで、慎ましく申し上げる侍女。

おかしいなあ

返事がなかったたので侍女は声を大きくして再び呼びかける。

「失礼します！」

しかし、依然として何の反応も返って来なかった。

（もう）

軽く嘆き、侍女は仕方なく、例の如く恐る恐る扉を開けて入室する。

すると何やら鏡に写る姿に見とれたままの女性がいる。いつものことながら困ったものであるが、やれやれと思いつつも、侍女は畏

まっつて声をかける。

「ロサ様」

鏡の前の自分に釘づけのままの若い女は侍女に目もくれずにポーズを崩さない模様。

侍女はあきらめずにもう一度注意をこちらに向けようとする。

「ロサ様 お呼びがありましたのでお伝えします」

が、目の前には相変わらず夢中で自分の世界に入ったままの青髪侍女は落ち込み、肩をすくませようと溜息を吐こうとした不意に。

「分かっている、マーガリート」

お楽しみ時間を邪魔されて不満そうな気品高い美女、ロサが凜と返答に応じた。

侍女マーガリートはショートボブの純白な髪をさらりと起き上がらせ、やや小柄な身体で報告を知らせる。

「緊急に会議がありますので 至急、長卓の間まで来るようにと のことです」

それを聞いて、ロサは僅かに眉を顰めて窺う。

「例の侵入者かあ」

マーガリートは小さな顔で軽く思索し、精一杯の答えを返す。

「察しかねますが、おそらくは」

「よしっ」

ロサは、はきと承諾し、再度鏡の方に顔を向ける。

ンフツ

そして、また不気味な含み笑いを作った。美女はやっと満足いったようなのか、ニヤリと一瞬口許を緩めるも、すぐに表情を引き締めて言う。

「ではっ、参ろうかあ」

「はいっ」

侍女は礼儀正しく頷き、主人の後を付いていった。

ロサとマーガリートが長卓ながたこの間に到着した時には室内は少々混乱していた。

見渡した先端が小さく見える程の縦長な部屋。その真ん中には前から後ろまでの大部分を占める長大なテーブルが置かれている。

そこに城の歴々れきれき（れきれき）である皇族が整然と列座れつざしている。腰かけているのは背もたれと座面ざめんに暗赤色あんせきのベルベットが仕立てられた高級椅子。行儀よく添えられた両手の前には天井から下がるシャンデリアの黄金がこげ茶の塗り机ぬめに宝石のような粒を光らせている。

ロサは自席に向かって移動する際に至る所で耳にした。

オレンジのローブに身を包んだ歴々達は口々に囁き合っていた。

『あの文書が狙われていたらしいですわ』

『全くどうすればいいんでしょう』

先日、祭典のために手薄てうすになった城内に忍び入った侵入者の件。フランソワーズが混乱を避けようと直隠ひたかくそうとしていたが、押し止められなかった様子。

誰もが城内に漂う異質な雰囲気ふんいきに感付き、言い知れぬ不安を胸の内に溜めこんでいた。

その蟠わたかまりは日に日に募もつっていき、やがてぼつりと。

『盗まれたのは、国律文書ではないかあ』と。

誰かが真実めいた妄言もうげんを口にしたことによつて城内全体へと伝播へんぱしていき、今に至った。

上座の中央に置かれた艶やかな緑の豪華な椅子。

その隣にある暗赤色の執事席しつじに座る侍女頭じじょうフランソワーズは私語ひそごを言い交わす皇族達を眺めながら自分の甘さを悔くいていた。

やはり 抑おさえきれませんでしたかあ

沈んだ気持ちしんんだきもちを払拭しようと、フランソワーズは銀縁の眼鏡の右端を軽く上げて大きく息をする。肺の中の空気を吐き出し、きりり

と頬を引き締め、双眸を確と据えた。

そのタイミングを見計らったかのように。

ゴホンツ、とフランソワーズの左前から咳払いがあった。

受けて、皇族達は話を続けながらも音源の方角にふと耳を敬て注意を向ける。

「皆さん 静粛に」

傾けられた皇族達の耳に低く芯のある声を通る。

壁にぶつかり合う残響と共に室内は鎮静した。

騒めいた場内を静めたのは上位階級の皇族、ウィール・ノーブル。押しも簡単には揺がぬようなどっしりと四角い印象のある壮夫。

ウィールは立ち上がり、静まり返った皇族達に声を上げ言う。

「姫様が居られぬのに 何を言っても同じであろう」

その言い分に納得させられるように皇族達はぐっと押し黙っている。

ウィールは向かいの席に座る青髪の美女に問いかける。

「アズール嬢、姫様、いや、王女様はどちらにいらっしやる?」

訊かれて、青髪は澄ました顔のまま口を閉じている。

美しさが足りないわあ

少しの沈黙。何となく気まずい空気が流れ始める。

見兼ねて、後ろで構えていた侍女が口添えした。

「王女様は現在 私用で席を外しておられます」

ウィールは眉を顰め、聞き返すように訊ねる。

「んっ、私用?」

この大事な時に姫様は何をやっておられるかあ

「それは何ようか?」

「え、その、しっ、心身の静養でございます」

何故かもしもじするマーガリートは、はぐらかしたように答えた。

一刻も早く王女様の出席を要するノーブル氏は、自ら出向かおうとする。

「そうか、では私が参ろう」

立ち上がるうとする壮夫を目にし、身体を硬直させ、さらに困った素振りをするマーガリートは震える声を絞って言う。

「おっ、王女様は只今浴間に居られます」

よっ、浴間!?

ウィールは内心驚き、微かにしくじったような顔をした。

ロサはその顔色を一瞥し、手早に美麗な口を開く。

「いい、私が赴く」

青髪の若い女はそう言って、席を立ち、白髪の侍女を連れて歩き出す。

ウィールの視界から遠退いていく青髪とその侍女は、やがて両開きの扉から退出していった。

室内に残された参列者達は王女が部屋に到着するまでに議論をまとめるため、しばし話し合いの場を設けることになった。

チャポーン 湯気が天井にへばり付き、滴となって湯船へと落下する。

平らな湯の上に広がる波紋には、ゆらゆらと揺れる二つの細い美曲線が浮かんでいる。

「ヴィオラ、二人でいる時ぐらい崩していいわよ」

上品な声色が撫でる先に、

「ですがグローリフィア様」

はにかむ優しいな笑み。

湯煙沸き立つ浴場で王女とその側近が、身体を火照らしていた。

金色の枠が所々に散見できる白き際立つ豪華な造り。中心には天井と繋がった頑強な支柱が直立し、その周りには白の衣服を纏った天使のような彫像が並んでいる。真っ直ぐに伸びた囲いの四隅には小さな獅子がゆったりと内側を眺め、その内の一端にある獅子の口からは湯が流れ込んできている。

髪を白のタオルで巻き上げ、王女と側近は澄んだ素顔を無防備に

晒さらしている。湯が胸に達する程の奥深な湯船には尻の高さに段差があり、そこに腰掛けている。隣同士に座って、同じ方向を向き、同じ姿勢をしている二人はまるで仲の良い姉妹のように見える。

「あれはいつの頃だったかしら」

グローリアフィアは優艶ゆうえんな唇で語り始める。

「私、本当は嬉しかったの」

思い出に浸りながら、カルチエ（王室の学校、カルチエ・ロイヤルの略称）にいた頃を懐かしく思い浮かべる。

「王室以外の方とお話したのは初めてだったわ」

目に浮かぶのは、シンプルながら洗練された教室の風景。高級感を表に出さぬように配慮された長机と椅子が整列し、遠目とつめに教壇きょうだんと白板はくばんが写っている。温かな斜陽しゃやうのベールに越しに見た午後ごごの一時。

一度瞬まはたきをして、現実に戻ったグローリアフィアはヴィオラの横顔に言いかける。

「だから、これからも」

言い寄る王女に側近は嬉しくも困りながら言う。

「よいのでしょうか」

んっ、と小さく微笑むグローリアフィア。

その無邪気な仕草しきうがさらにヴィオラを困惑させた。ヴィオラは次の言葉を思索し、もじもじと身体を震わせている。滞ためった会話の間をちよろちよろと湯口から流れ込む水の音だけが響く、穏おだやかな時間の流れ。

あまり迷ってはいけなないと、ヴィオラは何とか思い切って言うてみる。

「私などがグローリアフィア様の側近を務めさせて頂いて」

グローリアフィアは、微かすかに湯を波立たせて嬉々きき（きき）と答える。

「ヴィオラ、あなたじゃないと務まらないわ」

「グッ、グッ」

必死に返答しようとするが、恥ずかしさの余り言い淀むヴィオラはそれ以上言葉が出てこない。

お湯によつて熱せられた身体から湯気が上がる。話に夢中になつていたために二人は全身が薄く赤みを帯び、軽く逆上させている。

そんな熱々（あつあつ）の中、

「失礼致します」

王女と側近の戯れに水を差すように若い女が割つて入った。

金棒の施された半透明の引き戸から凜々（りり）しい声が浴場に入り反響する。

「王女様、御休養の所恐縮でございますがお伝えしたいことがございます」

青髪美女ロサは戸の側で半身になつて耳を傾ける。

浴場では寛ぎモードから、はつと気を引き締める王女とその振る舞いに同調する側近。

グローリフィアは脱衣場に向かい声を上げて返事をする。

「はい」

するとすぐに、スマートだが籠った声が返ってきた。

「只今先刻の侵入者の件に関し会合を準備しております。用意が整いましたら長卓の間まで御出で下さい」

んっ 案の定ですかあ

一瞬、顔を曇らしたグローリフィアはきりつとした表情を作り、はきと告げる。

「承知しました。すぐに参ります」

受け取ったロサは、引き戸の合わせ目に向けて、

「畏まりました 卓間にてお待ちしております」

恭しく発言し、きちりと一礼をして、長卓の間へと戻つて行った。

半透明の引き戸に写っていたグラマラスなシルエットが消え、王女は軽く息を抜いて脱力

してから、ちよつとふてくされた顔を整え、側近を言い促す。

「上がりましょう」

？

いつもなら『はい』と二つ返事が来るはずなのに、おかしいと思
ったグローリフィアは改めてヴィオラの顔を窺う。

見れば、ふらふらと頭を揺らすヴィオラが居た。

慌ててグローリフィアはヴィオラに近寄り、ぎゅっと抱き寄せる。

「ちよつと！ヴィオラ、大丈夫！？」

柔らかな膨らみを押し当てて介抱するグローリフィア。

体中に熱い血が巡るヴィオラは、肌色に包まれたあやふやな視界
の中、呼びかけに応えようと必死に呻き声を上げた。

「グツ、グツ、……グツ」

そして、天窓から差し込む陽光に意識が紛れていった。

執事席のフランソワーズから見渡した長卓には延々（えんえん）
と皇族達の組んだ手が並列している。

議題に上がっている侵入者の件について、取り交わされる会話は
差し迫るように厳粛な空気を放っている。

その正体を発くべく、長卓の中途に座る騎士団の団長が口を開いた。

「それは獣、いや、シオモルフ（神態）の仕（し）業（わざ）かもしれませ
ん」

聞き覚えのある名前を耳にし、ざわめき出す皇族達。

彼らの心中を代弁するように上位皇族のノーブル氏が対応する。

「んっ？ シオモルフ！？」

きつく眉をひそめ、声を荒げて団長の発言を否定する。

「何戯言を申すかあ！ 奴らはそのような神格化された者ではない

！ 凶暴な獣だ？」

響き渡る怒声に団長は気圧されて息を呑んだ。

王族と皇族が占拠する王国会議は一般民から唯一出席を許された
団長を容易には受け入れない姿勢を保っている。

しかし国のためとあれば、公平に臨みたいという考えを持つフラ
ンソワーズは劣勢の団長を後押しするように嫌な雰囲気を払拭した。

「構いません！ 詳しく述べてください」

そう言って、フランソワーズは固く握った万年筆を帳簿に近付けて前方に目を据える。

受けて、団長はおもむろに話を続ける。

「はい シオモルフは、時に人に化けることがあります」

突飛な内容に、黙って耳を貸していた四角い壮夫が聞き返す。

「なにっ？ それは真か？」

訊かれた団長は、真摯な顔で自らの体験を明かす。

「先の大戦中にこの目で確と捉えました 息絶え、獅子の姿へと戻つていくところを」

即座に覆い被せるように壮夫の言葉が飛ぶ。

「しかし、未だに信じれんのだよ。獣が人の姿に化けるとは……それでは我らと同じではないかあ！」

声高に言い放つ中、ノーブル氏の視界の端に青髪がすつと席に着くところが写った。

壮夫は正面に座る美女に視点を移し、丁重な姿勢で伺った。

「アズール殿、王女様は如何であったか？」

自らが言い出した事は抜かりなく完遂する質の口サは、真つ直ぐな目で前を向き、正しく報告する。

「今こちらに向かつております」

そう聞いて、安心したノーブル氏は僅かに肩の力を抜いて言った。

「そうかあ、では続けよう」

青髪騎士口サを交え、長卓で再び熱い討論が繰り広げられる。

大慌てで正気を失ったヴィオラを抱き上げ、グローリアは脱衣場に入った。

華奢な身体には似合わぬ豪腕の持ち主のグローリアは、軽々（かるがる）とヴィオラを深みのある濃茶の寝椅子に横たえさせて、無防備なままの姿をふわふわのバスタオルで覆う。

自分の胴体にタオルを巻き付けながら、グローリフィアはヴィオラの寝顔に優しく声をかける。

「ヴィオラ、起きて、ヴィオラ」

遠くから聞こえる声に呼び起され、意識の底から浮き上がり、ヴィオラはゆっくりと瞼を開いた。

「もう、どうしたの？ いきなり眠っちゃうなんて」

心配そうに側近の顔を覗き込む王女。

（わっ わたしは）

温かな光と共に覚醒し、ヴィオラは状況を確認する。

目の前には可憐な白い肌が写っている。

視線を広げて見ると、しなやかな首筋と細やかな鎖骨。その下には。

安心のタオルを巻いている。

ヴィオラは一安心して、ゆっくりと起き上がって話しかける。

「グローリフィア様、申し訳ございません」

グローリフィアは、ほっとした様子でやんわりと気遣う。

「ヴィオラ、心配したわ、どこも障（さわ）るところはない？」

「はいっ」

胸元でタオルを食い止めながら、ヴィオラはすんなり返事をした。了解したグローリフィアは早速、事に移る。

「そう それじゃあ 着替えて長卓の間に行きますよ」

そうして二人は素早く平装に着替えて、王国会議に向かった。

反響し合う拍手の後の静まりに満ちる長卓の間。

臨時に開かれた王国会議は終盤に差し掛かるうとしていた。

「それでは、満場一致ということで以下に決定します」

執事のフランソワーズが記帳した文面を整然と読み上げる。

「件の侵入者を西の森の獣と見なし、王国は討伐隊を結成し、脅威を排除する」

一息置き、さらに語気を強め宣言する。

「こちらの事項を王女様に提出します」

言い終え、一同は肩の力を抜き、大きく息を吐く音と共に空気が緩み、安堵の表情を浮かべた。

あとは王女様の出席を待つのみ。誰しもの心の中に焦る思いが募っていく。

一通り感慨にふけた後に来た静寂は波音立たぬ水面のように張り巡った。

その水鏡に二輪の花が写し出される。薔薇のように華やかで美しい衣装を纏った王女とその傍らをベストと礼服を着込んだ側近が控える。

グローリフィアとヴィオラは、満を持して皇族達の前に登場した。参列者の方に軽く会釈をし、颯爽と席に着いた王女に執事が帳簿を差し出す。

「王女様、こちらをご覧ください」

流れるように、王女は執事が認めた書面に目を通す。

討伐……ですかあ

文面を窺った王女は、その中の一句に引掛かった。

ですがっ

「問題ありません、了承します」

そう言つて、隣に立つ側近から万年筆を受け取ると、文面の右下の空欄に筆記体でサインを記した。

最終的に全ての案件の決議権はこの国を統べる王女が執行する。

これがガーネット王国が築き上げてきた方法。

サインを終え、背筋をぴしと伸ばし、グローリフィアは厳格な姿勢で参列者達に告げる。

「これにて臨時王国会議を閉廷します」

歴々はぴたつと静止し、深く礼をしてからそれぞれの皇務に戻っていった。

自室に戻った王女は、側近と共にトロピカルなグラスを手に持っていた。

浅緑あさみどりに満たされたストローの口から離れた淡紅たんこうの唇が動く。

「王女様」

アンティークな椅子に腰かけていた王女は堅苦かたくるしい呼び方に納得せず、即座に言い返す。

「グローリアアでいいわ」

すぐ隣で直立している側近は無言で頷き、丁重に言いかける。

「グローリアア様」

王女は耳を敬そはだてて、淑しとやかに窺うかがう。

「何？」

「先程の会議ですが」

語調を濁らせ、言いづらそうに口にする緑髪りよくみの側近に王女は釈然しゃくぜんと説とく。

「わかってるわ、でも、大丈夫、心配いらないわ」

「はい」

すんなりと受け止めた側近は、肩の力を少し抜けたように表情が綻ほころびた。

グラスの中の浅緑を興味深く見つめながら、グローリアアは打ち解けて話す。

「それより、おいしいわね」

同調したヴィオラは、自らの感想を在あり在ありと述べる。

「ええ、魅力的な色です」

「ふふっ」

真剣じみたセリフに可笑おかしくなって、王女は笑みを零こぼした。

他愛のない会話の内に、厳おそかな会議の名残なごりを少しずつ取り去っていき、王女と側近はまた普段の調子に戻っていった。

試験から数日経つと、城から通知が届いた。この間、試験場まで案内してくれた奥ゆかしい麗人が直々（じきじき）に住家まで出向いて渡してくれた。袖口に白いギャザーの施された長袖の上から薄オレンジのベストを着込み、上腕には赤い菱形のガーネットが刺繍された黄金の腕章を装着している。ぴったりと肌に密着しているオフホワイトのパンツの裾には、ベストよりやや色濃い橙のブーツで覆われ、脛の部分すねを朱色の紐ひもで締めている。

麗人は思わぬ訪問に意表を突かれた僕に素早く一枚の封書を手渡すと、早々（はやばや）と次の場所に向かつて行った。

受け取った上質な白の封書には、赤い菱形の蠟ろうで封をされている。破いてしまわぬように注意をして中身を取り出し、封入されていた半切紙はんぎりがみの文面を読む。

『明日 正午 ガーネット城 フォルティス講堂まで来られたし』

短すぎる文面から舞い戻り、僕は前方を見据えた。

正面にある長方形の演壇えんだんに向かつて半円状に湾曲した机と椅子が一段ずつ低くなって並んでいる。中段の僕から見える下段の座席には3〜4人座っている。後列にも同人数が着席しているため、試験を通過したのは総勢10数人ということになる。

城に招致された僕はちゃんと期日通り城内の講堂に行き着いた。

試験の時と同じ銀髪ぎんぱつの堅甲けんこうな目付きをした女性が演壇で演説をしている。

「皆さんもご存じの通り我が王国騎士団はこの国を他国からの侵略や獣達の襲撃から守るために発足致しました」

端正な声たんせいが滑々（つらつら）と講堂に響く。

「今まで貴方達は、我が名誉あるグラーナ騎士団フォルティスに守られています」

「畏まった話が苦手なのだろうか、前列に座る数名が頭を掻いて気怠そうな素振りを見せている。そんな中、一人の健気な背中が目に留まった。」

「そんな貴方も、本日からはこの名誉ある騎士団に入隊し、民を守っていくことになります」

所々の語句を強調して声を張り上げている銀髪の貴人の話を聞きながら、僕はずっと健気な後姿が気になって仕様がなかった。

「これは大変立派なことであります」

事細かに長々と続いた講演から一段落し、通過者達は前述の注意事項を実地で確認するために城内を案内してもらったことになった。

一同が講堂の左右の出口に立つオレンジのローブに身を包んだ貴女の方へとぞろぞろと向かう中、僕は出口付近に差し掛かったところで横合いから声をかけられた。

「あつ、ちよつ、ちよつと君ーっ」

音の聞こえた方へ何気なく振り向くと、くすんだブロンドの前髪を片方に垂れ流した優男と目が合った。

「はっ、はい」

取りあえず返事をした先には、カーキのズボンとベージュのシャツの上から、手、肩、膝、胸、腰に銀甲冑を装着し、輝きの褪せた銀のブーツを履いている恰好。

優男は通過者の合間をするりと抜けて、すたすたと近寄ってきて、困ったような顔をして訊ねてきた。

「今、手空いてるかなあ？」

「えっ、はあ」

僕はどうしていいのか分からず、言葉を濁らした。

「よしっ、そうかあ、それじゃあ来てもらおう」

しかし、優男に上手く丸められて断れない僕は半ば強引に連れられていかれてしまった。

出口を出る際に、

「すみません。一名お借りします。」
優男は貴女に手厚く礼をして、淡黄色が鮮やかな廊下を進んでいった。

壁の両側に直角柱の照明が煌々（こうこう）と浮かぶ中、質感豊かな木扉を幾らも目にした。

フォルティス講堂を出て、廊下を真っ直ぐ行って、一つ目の突き当りを左に曲がって、さらに直進した。

おそらく、ここは館内の端の部分に位置するんだろう。まああの距離を歩いた気がする。

最奥にある堅い鉄製の頑丈そうな大扉が見え始めた頃、すたすたと前を行く優男の歩く速さが緩んだ。そして、奥から二番目の扉の前で横を向いた。

優男は躊躇することもなく部屋に入っていく。僕もその後が続いて入室した。

着いたのは、壁に藍色の煉瓦が敷かれた落ち着きのある部屋。中央には、端々（はしばし）が僅かにささくれた四角い机に四脚の木椅子が各辺に収められている。その上にはランタンが置かれている。僕はドア近くで立ち止まって、室内の様子を観察していた。そして、たらずくに、もうひとつ扉があるのを発見した。

半分開いたままの堅そうな鉄扉は、雨雲みたいな鉛色をしている。奥に何があるのだろうと隙間に注目していたら、優男が機嫌良くやって来た。

「よし、これをグレアムさんところに持って行ってもらおうか」
そう言いながら、こちらに寄ってくる。両手で木箱を持ち、その中には長さが不揃いの棒が鈍く光っている。

調子よく言い包めてくる優男の勢いを止められず、僕は聞き覚えのない単語が出て来たので、良く分からないが質問した。

「グレアムさん？」

「ああ、新入りだったかあ、グラムさんは鍛冶屋の主だ。城下のすぐ横にある」

優男は怠^{だる}そうに木箱を抱^{かか}えたまま、まるで顔見知りのような馴れ馴れしさで答えて、僕に木箱を手渡してきた。

「取り敢えず行けばわかる、ほらよっ」

「んっ！」

重い

予想外の重さに思わず、力^{りき}んでしまった。

両腕を大きく広げてやっところ抱えられる程の木箱。近くで見ると、中には折れた剣や槍が入っている。

「おっつと」

初めて間近で見た切っ先の鋭利さに気を取られて、ちよつとぶれてしまった。

その様子を見て、優男は斜めに垂れた前髪を軽く揺らし、「しょうがないなあ」

もう一人呼ぶかあ

思い付いたように部屋の外へと素早く出て行った。

取り残された僕は一先^{ひと}ずこの重たい物品^{ぶつびん}をどうにかしようと、適当な置き場所を探したがなかった。床に下ろすことにした。

そんな中、遠くから優男の声が耳に入ってきた。

「おーいっ その君っ 何も言わずに手伝ってくれーっ」

木箱を下^おろす最中だったが、経緯^{いきさつ}が気になったので僕は木箱を持つたまま戸口までにじり寄った。

覗^{のぞ}いて見ると、ちょうど廊下を歩いていた人の良さそうな少年が呼び止められていた。

集団の中の最後尾にいた彼はきつと麗人^{れいじん}による案内の途中だったのだろうが、そんなことお構いなしに優男は立ち回り良く連れてくる。

僕はその顔というか雰囲気に見覚えがあった。確か講堂で前に座っていた一際^{ひと}健気な人だ。

迫ってくる二人の姿を確認した僕は、部屋の中に引っ込んで待機した。僕も今日から騎士団の一員なんだから誠実な姿勢を心掛けよう、と思っていたら、早々と二人が部屋に入ってきた。

入室するやいなや、優男は段取り良く連行してきた相手の肩を親しげにぽんと叩いて、追い抜くような形で奥の部屋に走り込んでいく。

その様子を追うように流し目で見た後、視線を正面に戻すと、戸口で突っ立っている優しげな瞳と目が合った。

僕と同じぐらいの背丈で、白いシャツと黄土色のズボンに黄色のショートブーツを履いている。色合いは地味で質素な感じがする。さらにダークブラウンの髪が耳を隠すぐらい伸びていて、その間の純朴な面影が素朴な印象を助長している。

僕と戸口に立つ彼が、連行されてきた同士見合う中、優男が木箱を持って戻ってきた。

「はい、それじゃこれを頼もうかあ」

そう言っつて、優男は調子良く純朴な少年に木箱を持たせ、僕の方を顧みた。

そして、優男の軽率な口が動く。

「出発だ、諸君」

騎士団の栄えある初仕事はガラクタを運ぶことだった。

両脇を若草色の芝生で覆われた石畳の道が巨大な門へと伸びている。

近づくに連れて、その大きさが如実に現れてくる。

全貌。目測で縦に5メートル横に4メートルぐらいの石の扉。

目の前に立ち塞がるこの門は、ガーネット城の西側に位置している。僕が居た建物から一番近い門口だ。

西門を前にして、僕は優男の言葉を思い出した。

促されるがままに部屋から出ようとした僕達を、優男は呼び止め

て補足説明をした。

『そうだそうだ 君達場所知らないんだったなあ 迷ったら面倒くさくなるから説明しとこうかあ 行き方は、正門を出て、左に曲がって、なんだっけなあ……あの坂……、そうそう、チェリー坂を下って少し行つたところだ』

当たり前のような感じで告げて、部屋の奥にある鉄製の本棚から何かを取り出して、

『それとこれを渡しておこう』

そう言いながら、軽快に僕と純朴な少年の上腕をぽん、ぽんと叩いた。

見てみれば、赤いワッペンが貼られていた。白く菱形ひしがたの模様が刺し繍しゅうされている。

『代用だ』

最後に告げられた言葉に背中を押される形で、僕らは足を踏み出した。

正門に接近する僕らの存在に気付いたのだろうか、待ち合わせたように巨大な門は、ごろごろと硬い石が擦れ合うような音を発しながら左右に開かれた。

門を潜って城外に出た僕らは、それから高々と築き上げられた城壁沿いに左に進み、さらに突き当りの角を左に曲がった。

その間ずっと、隣にいる純朴な少年に何か話しかけようか迷っていた。

そうやって逡巡しゆんすんしている内に、僕らは正門の前を通り抜け、緩やかな下り坂に差し掛かっていた。

よかったあ これが上りだったら、大変だったろうなあ

右手に立ち並ぶ実りを控えた桜の木々の間から、途切れ途切れに城下街が見える。

心地よい木の香りが胸に伝う。

僕はとにかく、下り坂の勢いに任せて話しかけてみることにした。

「あの」

と話し出そうとしたら。

「桜の木が麗しいですね」と隣から真摯な声が聞こえてきた。

僕は一瞬息詰まったが、素早く合わせてみた。

「そうだね、ここがあの人が言っていたチエリー坂みたいだね」

「はい、確かチエリー坂を下って少し行ったところです」

誠実な口調で誘導されたセリフが紡ぎ出される。

そして、ぐっと顎を引いて、口を開く。

「申し遅れましたが、私はステファン・セリオと言います。よろしくお願いします」

ちよつと真面目過ぎる紹介に驚いたが、僕は普段通りに名乗った。

「うん、僕はアモル・ウイレンス、よろしく」

続けて、愛想よく付け足す。

「講堂で君の後ろに座っていたよ」

僕が言い終えた直後、ステファン君の身体が急に止まった。

ステファン君は申し訳なさそうにしながら、謙虚に言う。

「あつ、えと、ステファンと呼んで下さい。僕達は城を守る同士なのですから……」

僕はその言葉に内心ほつとした。折角、仲間になれたのだから楽しくいきたい。

そう思いながら、僕は親しげに応えた。

「うん、わかったよ、ステファン」

「はい、共に励みましょう、アモル」

ステファンが頼もしく言い終えた頃、僕らの足は緩やかな傾斜から平坦な道の上を進んでいた。

城壁の途切れ目に、煙突屋根の小屋が覗いている。

僕らは一旦会話を止め、気を引き締めてその小屋を目指した。

『SMITH GRAHAM』

戸口の上に取り付けられた木製看板に白字で刻まれている。光沢

のある焦茶の木目が、技巧的な雰囲気を醸し出している。
風格のある外観に気圧されて、扉を目の前に僕は思わず踏み止まってしまった。

距離が縮まるに連れて、段々と小屋の形は変貌していった。初めは小さな建屋だと思っていたら、間近に来てみれば、立派な煉瓦作りの建物だということが分かった。

赤茶の煉瓦で固められた分厚そうな壁とモスグリーンの風合豊かな屋根。

僕はその美観に見入ってしまった。

木箱の重さに堪え兼ねて、立ち止まっていた僕はグレアムさんを呼んだ。

「すみませーん、グレアムさんはいらっしやいますか？」

返答は来なかった。しかし、程なくして扉が開けられた。

「なんじゃ？」

グレアムさんは、顔一つ分の隙間からこちらを窺う。黒髪に白髪が混った生きの良さそうな面に外光が当たっている。その視線は、僕達が持つ木箱の中の折れた剣や槍に向いていた。

中身を視認したグレアムさんは、すぐに僕達を招き入れてくれた。「入ってくれ」

単調な声で言われ、僕は工房の中にお邪魔した。

入室するとすぐに、炭の香りが鼻孔を通った。

踏み入れたのは、外壁と同じ赤茶の煉瓦のシツクな壁で内装された広々とした空間。四角に囲った竈。火床、壁に掛けられた長みの鋏、火箸、他に木工机に長短様々なハンマー（槌）やヤスリなど、鍛冶道具が揃えられていた。

僕達がぼうつと突っ立っていると、グレアムさんから指示が飛んできた。

「ここに置いてくれ」

そう言われ、僕達は木箱をグレアムさんの足元に置いた。底面が床に着いた途端に全身が重荷から解放され、ふわふわと浮遊しているみたいに軽くなった。

グレアムさんは腰を屈めて、剣や槍の状態を確かめる。上衣が白で下衣が紺の作務衣を着こなし、短身瘦躯だが、捲った袖から伸びた腕には筋肉が隆々（りゅうりゅう）としている。

「全くどう扱えば刀身が真っ二つに折れるのじゃ？」

顎を撫で、嘆息するグレアムさんはそのままこちらに話を振った。「この量を運んでくるのは大変じゃったろう」

透かさず、ステファンが反応する。

「はい、頼まれたんです」

「ぬっ」

ステファンの言葉が耳に入ると、急にグレアムさんは眉尻を上げ、腹立たしく口を開いた。

「そいつはフリードだ。やつめ、仕事を押し付けよって……」

僕らは、突然しかめっ面になったグレアムさんを前に、ただじつと様子を窺っていた。

「あいつは口先と逃げるのだけ、卓越しよって……毎回毎回上手く隙間に付け入ってくるのう……」

グレアムさんは余程鬱憤が溜まっているのか、ぶつぶつと不平を漏らしている。

僕らが黙って見守る中、一通り嘆き終えたグレアムさんは、ぼんやりと目覚めるように我に返り、口にした。

「んっ、すまんすまん、君達ご苦労だった」

「はい、それでは私達は城に戻ります」

ステファンが真面目に告げ、僕らは城へと帰った。

藍色の沈着な壁に囲まれた部屋、騎士団の休憩室で一本の白煙が立ち上っている。

入団したばかりの初心うぶなな新入生に手早く面倒な用務を仕向けた優男フリードは、椅子に腰を下して、煙などを吸っていた。

うんめえーっ 休憩中の一服は最高だぜー

などと、虚偽ばかりの事柄で解釈をして安楽に浸っていると、出し抜けに入り口の扉が開いた。

「おー、フリード」

機嫌良く入ってきた騎士団の団長スターク・ウォルターは、フリードが手にしていた煙草に気付くと忽ちたちま、表情を強張らせた。

「だっ、団長！」

その顔を見て仰天し飛び上がるフリードは煙草を放り投げ、棒のように直立したまま硬直した。

団長は鋭い目つきで凍結フリードを見据え、低く唸うなって問いただす。

「貴様 何を吸っている!？」

蛇へびに睨にらまれた蛙かえる状態のフリードは全身から冷や汗を多量に流し、分が悪そうに口を動かす。

「いやあ、これは……」

「城内は禁煙だとなんと言えはわかるのだ!」

スターク団長は、構わず一喝をし、

「へっ! すみませーん」

もついつものことだから仕様が無いと半ば諦め、別の方法で懲こらしめることを考えていた。

「ふんっ このわし自ら来てやったというのになあ」

潔けつい団長の態度に、安心すると共に少し訝いぶかしく思いながら、フリードは傾聴する。

「つい先日決まったことだが、新しく隊を結成することになった」
驚きの新事実しんじつに、フリードは事の詳細が気になる。

「その隊を率いるのはルドルフに任せておいた 貴様には補佐役として同行してもらっぞ」

あっという間の告知を聞き、フリードは引っ掛かるところがあっ

た。

「あのルドルフがですが？」

「何か言いたいことでもあるのか？」

「どうして自分が隊長ではないのか、という疑問。」

「いえいえ、そんな、ただ」

「ただ？」

「ルドルフはこの間入ったばかりの新米ですよ」

「どう考えても自分が適任だとフリードは思う。」

「だから何だ？」

「そんな大事はまだ早いんじゃないですか？」

団長、俺がいるでしょうが、俺が

「ふっ、貴様にはわからんだろうが奴には素質がある」

なんで分からないんだ

到頭堪えきれず、フリードは自ら主張する。

「他にも相応しい者が居ると思います」

その言い方から瞬時にフリードの心境を読み取ったスターク団長は確と説明する。

「ルドルフはいつも尽力をし、皆を引っ張っている……。足を引っ張ってばかりいる貴様と違ってなっ！ 貴様は万年班長だ！ さっさと城務に戻れ！」

「はいっ！」

大急ぎで飛び出していくフリードを見ながら、

っ、あいつはいつまで班長のままだ

頭を抱えるスターク団長だった。

城に帰った僕達は西門を通り抜けた所で、こちらに走ってくる優男改めフリードさんに出くわした。

「おう、ご苦労、ご苦労」

気安く話しかけながら、フリードさんは僕らの前で足を止めた。

先輩が自ら足を運んで確認しに来てくれたと思ったステファンが、
丁寧に報告をする。

「無事、任務遂行しました」

その言い方がとても気に入ったフリードは感動し、

「おーっっ」

こんなにも俺を慕ってくれる人がいるとは、騎士団やってて
よかったーっ

気分上々になり、ふと思いついた。

「えー君達、まだ城内の案内はまだだったよなあ？」

「はい」

ふっふっふっ、と自信ありげな含み笑いをし、誇らしく言った。

「それじゃあ、このフリード・イージング自ら城内を案内してやる
ぜ」

そういうことで、僕はフリード班長に改めて案内してもらおうこ
とになった。

「そうかあ、アモルとステファンかあ、俺はフリードだ。騎士団の
総括班長をしている。よろしくな」

城内の案内といっても、簡単なものだった。細かい所はあとで覚
えておけばいいという、お気楽な説明だった。

フォルティス講堂があるこの館は、西館と呼ばれていて、騎士団
のために与えられた施設らしい。

フリードさんは手っ取り早く説明を終わらすと、こんなこと口に
した。

「あの銀縁眼鏡の淑女さまは、魔法が使えるらしいから刃向わない
ようにな」

すごく苦々しい顔をして話すフリードはさらに、西館から外に出
て、独り言のように言った。

「主館には強いお方が集結しているからなあ、とにかくあの館には

用がある時以外は近づかない方がいい」

そして、歩いて敷地内の左隅に辿り着き、

「ここが騎士団の宿舎だ。明日は朝早いからちゃんと準備しておけよ。じゃあな」

フリードさんはさっさとどこかに行ってしまった。

夜が更けたガーネット城の本館の通路にて、スターク団長は部下のルドルフを発見した。

「おう、ルドルフここにいたか」

「団長、どうかされましたか？」

「ああ、ちよつとなあ。報告がある。ここじゃまずいから、休憩室で話そう」

「はい」

そうして、二人は騎士団の休憩室へと移動した。

「だから、ルドルフお前に黙討伐部隊“新鋭”カッティングエッジの隊を率いてほしい」

「わっ わたくしがですか？」

椅子に座る団長は、ルドルフに詳しく説明をしている。

「どうだ、良い名前だろう」

「はい」

突然、重大なことを聞いたルドルフは頭を整理しながら考えている。

そんなルドルフに、団長は腰から短刀を取り、切っ先を光に反射させながら言った。

「カッティング、エッジだ。今、乗りに乗っている君に適任と思つてなあ」

「ですが、」

「ん？ なんだ」

「そのような大任をわたくしなどで務まるのでしょうか？」

「大丈夫だ。わしの目に狂いはない」

ルドルフは、力強く団長に説得され、

「わかりました」

首肯し、黙討伐部隊の隊長になることになった。

幾つもある部屋の中から、扉の横の白いプレートに自分達の名前が記載されているのを見つけ出した僕とステファンは、そのままその部屋に入った。

室内には、左右にベットと机一つずつ置かれていて、大きくはないが、僕の部屋よりはスペースがあるような気がした。

腰の高さにあるベットの下には、クローゼットが備えてあり、収納に便利そうた。

僕とステファンは、初任務の木箱運びで身体を疲れさせていた。だから、僕らは何も言わずベットに腰を掛け、休憩した。部屋を入って右がステファンのベットで、左が僕のベッドという風に自然になっっていた。

日が沈んだ頃になると、外から人の足音が聞こえたので、僕とステファンはその気配につられて外に出た。そのまま人々が足を向ける先に行き着いたら、そこは食堂だった。宿舎の一階の隅に敷設されている。

食堂の中には、ざつと縦に机と椅子が並列されていて、すでに騎士団の団員が方々に座っていた。僕とステファンは、見よう見まねでトレイを取り、配給カウンターに並んだ。カウンターの様子を覗いたら、次々とトレイの上に湯気が立つスープとパンが置かれていた。僕の番が来ると同じように食品が載せられた。それで、身近な席を探してさくつと夕飯を済ました。

夕食後、部屋に戻った僕とステファンは、自分達の身の上的話をしていた。

「それでステファンはどうして騎士団に入団したの？」

先に僕が自己紹介をしたので、次はステファンの番だ。

「僕は、家族に少しでも裕福な生活してもらうため、かなあ。騎士団に所属すれば、街での仕事よりもたくさんお金が貰えるらしくて、

だから僕は騎士団に志願したんだよ」

「そっかあ」

ステファンはとても苦勞しているらしかった。僕は今までそういう体験をしたことはなかったから、とにかく頷いた。でも分かる気がする。今日見たステファンの真摯な姿勢はきつと自分のためだけにじゃなくて、誰かのために行動している表れなんだろう。

僕が考え込んでいると、ステファンがおもむろに言い出した。

「もう明日は早いから今日はここまでにしよう」

僕はステファンの方を改めて見て、

「そうだね」

って、返事をしてベッドに横たわった。

騎士団入団初日、僕は一抹の満足と明日への期待を胸に瞳を閉じた。

朝霧が立ち込める中、木立の頭上から温かな橙の朝陽が射し込む。辺り一面を群生する木々に囲まれた空地。この辺りだけ穴のように丸くぽっかりと開けていて、見通しが良い。ここに来るまで距離はさほど遠くはなかったが、何より小道の端に絶え間なく写る背の高い立木に道のりが長く感じられた。緑草と黄土の平地の上に、集合している騎士団の新入生達。その軍団に向かいから上官が指示を飛ばす。

「これより野外演習を行う」

野外演習場。

僕はガーネット王国の西にある森、通称獣の森にいた。

「各員遅れずに、付いてくるように」

総勢14人のメンバー。先導する上官2名と新入生12名。その中から等分して、2組の班に分けられた。まだ入団したばかりの新入生達は、胴と各関節部分に甲冑を取り付けて軽装で臨んだ。2人の上官も同じ格好をして、肩に青と赤のバンダナを巻いている。このバンダナは、班を識別するために使用されるらしく、団員達は先頭の上官にならない同じ色のバンダナを巻きつけた。

訓練の内容は至って簡単。ただ、草やぬかるみ、倒木などの足場の悪い場所を移動して、甲冑に慣れてもらおうということだった。

この森の中には、緩やかな小川が流れていてるらしく、そこを指すのだと冒頭に説明を受けた。

そして、いざ出発。

僕とステファンは運良く同じ班になった。おそらく寮の部屋割に準じて班分けをしたんだと思う。班長は、ヘリオ・フレッチャーさん。片手には金の弓を、背中には矢筒を装備している。分厚く広い肩と筋肉が隆々とした屈強な肉体を持つ豪傑な上官。その大きい背

中に僕らは、引つ張られてついていく。

草木を掻き分けて、ただひたすらに黙々と進んでいく。時々、耳を澄まし周りの様子や気配を慎重に察知して、僕達がしつかり後をつけて来れているかも気にしてくれている優しい兄貴。スターク团长もカツコイイと思うけど、ヘリオ班長改め、ヘリオ兄貴も十分カツコイイと思う。

新入団員達がどうして遅れを取っているかというのと、皆背中になきな背囊はいのうを担いでいるから。中にはまだ何も入っていないみたいだが面積を取るため、足取りが遅くなるのも当然といえる。僕も初めはバランスが取りにくくて手間取った。今は大分慣れてきて、張り出した木の根やでこぼこの地面に足を取られることはない。僕の前にいるステファンも同じように慣れてきたみたいで、淀みなく歩いている。

上方から木漏れ日が、点々と褐色の土に差している。ちらりと横を見てみると、至る所に光の斑点が描かれている。木々の隙間にはまた木が存在し、どこまで限りなく群生している雄大な景色。これが獣の森なのかあ、という獣が出てきてもおかしくないなあと納得する雰囲気がある。

「後少しだーっ！ 気を引き締めて行けーっ」

前方からヘリオ兄貴の快活な声が聞こえてきたと思ったら、微かだが水の流れる音が耳に入ってきた。ちよろちよろ、さらさらと涼しい響きが身体に伝わってくる。全身から溢れ出すようにやる気が沸いてきて急に歩調が速くなった。それは、前に行く人達も同様で一斉に音源へと足を進める。

段々と空気に瑞々（みずみず）しさが混じっていき、木々の隙間から水色の潤沢が写り始めた。程なくして森の小道を抜けて、視界が急に明るくなり、目の前には小川が写し出された。どうやら目的地に着いたみたいだ。団員達は安堵の表情で皆、川を眺めている。辺ほとりから見ると、穏やかな川瀬が見える。大石が2〜3個覗いていて、流れ込みには小さな泡が渦巻いている。上流から下流へ真っ直

ぐに流れていて、どこに繋がっているのか気になった。

「おい、まだ着いていないぞ」

陽光に金色の髪を光らせながら、ヘリオ兄貴が言う。

「ここから水源を目指して、上流にもう半時程歩く。行くぞ！」

皆を引き寄せるように、腕を振り、ヘリオ兄貴は歩き出す。

団員は暫し緩んだ顔を引き締め、その後が続いていった。

川岸には植物が生い茂っておらず、さっきの道よりも幾分歩きやすかった。だから水源に辿り着くまでそう時間はかからなかった。元々、山に囲まれたガーネット王国からは、森の奥にある水源までの距離は近く、こうやって容易に清水を手に入れることができる。なので、たとえ下流域の水でさえ、綺麗で十分に飲むこともできる。今回は、きつとより良い水を求め、精神的、肉体的にも鍛えようということなんだろう。

鳥の囀りなげと、清らかな流水音を聞きながら、僕は色々と考えながら歩いていった。

徐々に道幅が狭くなり、やがて、石が堆積した滝のような場所に行き着いた。

「ごつごつとした石の間からあちらこちらに水が流れ出ている。

源泉。

ここがきつとそうなんだろうと確信した。

ヘリオ兄貴は滝の近くまで寄ってこちらを振り返り、仁王立ちになつて満足そうに言う。

「さあ、到着したぞ」

「ご機嫌な兄貴に対して団員達はあまり嬉しくない様子みたいで、僕もあまり気に乗らなかつた。というか何か嫌な予感がしていた。

「各員、背囊からタンクを準備してーっ」

団員達は一様に背中から背囊を下ろし、中からポリタンクを取り出す。その姿を確認したヘリオ兄貴はとうとう言ってしまう。

「その中にこの水をたっぷり入れてもらう」

団員達の中で、さーっと波が引く感じがした。予感的中みたいで

皆、重い足取りで滝に近付いていく。僕も滝に向かおうとしたのだが、途中で、

「君達は、こつちだ」

ヘリオ兄貴に捕まった。にっこりと笑みを浮かべて、後ろ半分の団員達に言い掛ける。

「この近くに食用の草がある。一人では手が足りんから手伝ってもらおうか」

「はい」

即座に答えたのは、ステファンだった。ヘリオ兄貴は嬉しそうな顔して、

「よし、こつちだ。皆、俺から離れないように固まって行動するよ
うに」

僕らに大きな背中を向けて、森の茂みの中へと進入していく。もちろん、ステファンもその後をぴったりと付いて行って、僕も遅れないように続いた。

茂みを小刀で掻き分け、ヘリオ兄貴は無尽に突き進む。まるで一体の獣が通った後のように、道ができ、僕らは難なく追従することができる。流石は兄貴。まだ合って間もないが、この行動力と頼りがいは物凄い安心する。どこかの優男とは全然違うなあ、と僕はもう一方のフリードさんが率いる班は何をしているのか、と思った。

前を行くステファンの背中が止まり、僕も足を止めた。覗いて見ると、そこかしこに倒木が散在している切り開けた土地が見えた。この森の真っ只中という場所で人の手が入ったような様相をしているのが驚きだった。

「各員、整列しろ」

「はい」

僕達は開かれた土地を前に、横一列になつて並んだ。

ヘリオ兄貴は急に厳肅な態度になり、話始めた。

「皆も知っているとと思うが、10年前に大きな戦乱があった。君達はまだ小さかったから覚えていないかもしれないが、本当に大きな

戦いだつた。ここは、その時に我らが獣と対峙した場所だ。この土地で多くの友が戦い、そして多くの友が亡くなった。王国のため、人々のために勇敢に戦った彼らに、ここで黙禱を捧げようと思う。」

ヘリオ兄貴が悲しみに浸っている間、全員が押し静まり、二の句を待つ。

一呼吸後。

「黙禱」

僕は目を閉じて亡き団員達へと追悼の念を捧げた。空を漂う雲が流れる風音、遠くからの葉擦れさえも聞こえる程の静寂。その状態が数十秒続き、やがてゆっくりとヘリオ兄貴が言葉を出した。

「ありがとう、あいつらも喜んでいると思う」

その目には微かに涙の色が見えたような気がした。

ふつと一息吐いて、さつと気持ちを切り替えたヘリオ兄貴は任務を再開する。向こうの木々を指さし、

「ここから見えるあの大木の下には、食用草や茸が生えている。列を乱さず、俺の後ろに続け」

すぐに言っていた木の下に着いた僕らは背囊からスコップを取り出し、木の根を掘り返していた。

ヘリオ兄貴は木をよじ登り赤や黄の実を摘んできて、木の下にいる団員にパスをする。団員は背囊の口を大きく開いて、すぽっとキヤッチして対応した。やがて、適量に達したと思ったヘリオ兄貴は木の上から華麗に降りてきて、近くの茂みに直進した。

目を左右に振り、素早く選別して、ひよろりと伸びた緑草に手を伸ばし、小刀で根の近くを切り、大きな手一杯に掴み上げた草を隣に控えた団員の背囊に入れていく。

さくさくと小気味良く作業を進め、あっという間にお望みの量まで達した。総勢14人分の量であるので、結構な量になるがいともしも簡単に集めてしまうのが、ヘリオ兄貴の凄味だなぁと改めて団員達は頷いた。

ヘリオ兄貴は屈んだ状態からすくと立ち上がり、辺りを見回し団

員の様子を見る。団員はもう背囊を背に担ぎ、準備万端。その方に目掛け、

「よし、滝まで戻るぞ！」

「はい」

きりつと、返事が上がり、一行は滝まで戻っていった。

滝に着くと、既に団員達はポリタンクを一杯にし、ヘリオ兄貴の帰りを待っていたようだった。その様子を嬉しく思い、

「休憩は終わり。集合場所に帰るぞ」

団員達は頼りがいのある背中に先導されて、元来た道を歩き始めた。

ここからあの空地まで、一時間程の距離。背中には果物が入って重くなった背囊。水も重いとは思うが、木の実も同様に重量があると思う。そろそろお腹も減ってきたし、体力が保つかどうか心配だが、もう僕は騎士団の一員だ。だからここで弱音を吐いたり、引き下がったりするつもりはない。だから僕は意識を集中させて、とにかく前だけを向いて集中して帰路に臨んだ。

夕陽が地平線上に沈んでいき、反対側の空が群青に染まっている。獣の森での野外演習。

安静な広場には夜風が優しく下りて、団員達の頬を撫でている。

一日目の訓練は無事に終わったみたいだ。集合場所には野営のテントが張っており、中央には松明とかがり火が焚き付けられている。昼と夜ではすっかり変わってしまった森の景色。

団員達は皆、ヘリオ兄貴特製の料理を頂き、満腹の様子。昼間に採った野草と木の根、そしてフリードさんの班が狩ってきたイノシシを煮込んで、最後に懐から自前のスパイスを入れて完成した。

曰く、”森鍋”。森の中での栄養を最大限に引き出した自慢の御一品だそうで、大層満足そうに仰っていた。

もちろん味は最高に良くて肉のダシと野菜の香りが芳しかった。何せ昼食はからからのパンを一切れだけで、お腹がぺこぺこだったのもきつと助長しているんだろうと思う。

集合場所に戻ると、ヘリオ班長は休憩もそこそこに団員達に指示を出した。野営のテント張りや松明の付け方。初めは簡単にできるだろうと侮っていたら、まだ慣れない僕は相当でこずった。細かく説明して貰えるが、杭を真っ直ぐに打ちつけることや布を均等に広げることなどに手を焼いて、気づけば日が大きく傾いていた。

やはりヘリオ兄貴の判断は正しかった。どうして、取り急いで事にかかると分らなかったが、今は納得している。何より自然に囲まれて食べるご飯は、格別においしかったから。そりゃあもう、いつものご飯の三倍ぐらいの味で。

僕はあの味を思い出してにたにたと頬を綻ばしていた。

横たわった丸太を椅子替わりに腰掛けて、隣にはステファンが背筋を伸ばして座っている。

「あの、ステファン」

「何？ アモル」

「さっき頂いたスープのスパイスってなんだったんだろ？」

「うーん、僕もあの味は初めてだったからなあ。でもおそらく薬草じゃないかなあって思ってる。口の中で丸く広がってくる辺りがね」

「へえ、薬草かあ。僕は木の実だと思ってたよ。確か西方でよく使われるっていう調味料。」

「あゝあ、ペッパーかあ。でも、それはちょっと違うと思うなあ。

どちらかというあの味は東方の味噌に近いものだと思うよ」

「味噌？」

「そう、味噌だよ。僕も食べたの一回だけんだけど、あのまろやかさは間違いないね」

「そっかあ、味噌かあ」

夕食後の休憩の中、僕とステファンは他愛もない話で寛いで、今までの訓練の緊張が嘘みたいな緩慢な空気に浸っていた。

「全員集合」

その引き締まった声に緩んだ身体に力が入り、僕は中央の松明の前で手を挙げて真っ直ぐ立っているヘリオ兄貴の方に駆け出した。

同時に他の団員達も一気に走り出し、四方八方から集まった団員達は輪を成して並んだ。

「よし、迅速だ」

ヘリオ兄貴は団員の対応に頷き、横にいるフリード班長を一瞥した。

フリード班長はその視線に気づき、すぐに話し始める。

「諸君、これまでの半日の訓練、よくやった。」

フリード班長は、優男の風をしているのに似合わず泰然とした口調で言っている。

「これから後、半日。つまり明日までの訓練内容を説明しよう。」

明日の正午までという言葉を聞き、団員達は何となく怪しい気配を察知する。

「まず、班は二つに分ける。これは今までと一緒だ。だが、今回は

俺とフレッチャー班長は同伴しない。つまり自分達の力で行ってもらう。」

団員達は苦い顔を表に出しそうになるが、ぐっと押し止めて後句に集中する。

「目的地は、ここから5キロ地点。昼間行った洞窟と滝だ。」

フリード班長は、懐からごそごそと二枚の茶色い紙を取り出し、「地図だ。各班に一枚ずつ用意した。それと、今回は君達には武器を持ってもらうことにする。知っていると思うがここは西の森、獣の森だ。この呼び名を一度は耳にしたことがあるだろう。その意味を一応説明しとくと、……あゝ、つまり、獣が出るっていうことだ。だから、もしかしてその獣に出くわすかもしれない。その時、丸腰だったらあまりにも不利だから、小刀を二本君達に預けておこう。取扱いには十分注意しろよ。」

そこまで言ったフリード班長は、「えゝ、フレッチャー班長から何かありますか?」と隣に話を振った。

ヘリオ兄貴は、うむ、と頷き、

「皆の者、我々はここに待機して帰りを信じて待っている。実際の任務では常に危険と隣り合わせにある。誰かを頼っても誰も助けてくれない状況だ。だから自分の力で一つ一つ越えていく必要があるのだ。なので、この訓練ではもしかすると脱退する者現れるかもしれない。それでも我は皆の勇姿を期待している。」

まるで戦場に送り出す前の真剣な表情で団員達を見つめ、ヘリオ兄貴はステファンに地図と小刀を渡し、フリード班長も近くの団員に手渡した。

何も言わず、昼間と同じフォーメーションで整列し、各班の団員は気を引き締めて合図を待った。

フリード班長はざっと全体状況を確認し終え、

「夜間訓練開始」

高らかに言い放つと共に、一斉に各班は左右に分かれて歩き出した。

がさごそ、と茂みが蠢いた気がした。

目を凝らしてその方を確かめるが、薄暗いため、ただ色濃い物体が列居しているように見える。

夜風を頬に感じ、遅れて音の正体は風なのだと知った。

昼と夜ではこんなにも変わってしまうものなのだろうか。昼間と同じ経路を辿っているが、まるで違う場所に來たみたいなき分だ。

縦一列に並んで山道をひた進む僕達の中に、戸惑いにも似た微かな不安が立ち始め始めている。呼吸が妙に速くなって動作が乱雑になっっているような気がする。一步、一步、前に進もうとする足が絡まりそう、注意してなくちゃ足を踏み外しそう。

先頭を行っているのは昼の訓練の時に一番活躍したステファン。思っていた通り彼の忠実な姿勢は群を抜いてこの班の中で統率力を有している。その証拠に団員達は何も文句は言わず、ステファンの後を付いてきている。

もう出発してから30分程経つので、そろそろ小川に差し当たる頃だと思ふ。耳を澄まして、川のせせらぎを拾おうとしてみても、しーんと静まり返った夜の森には、風が吹く度に葉擦れの音が聞こえてくるだけ。

奇妙な静寂に満ちた森の中。なんとなく背がぞつと冷たくなりそうな雰囲気がする。

カーブに差し掛かり、木々の隙間から赤い灯が見え隠れしている。蛇行する列の最後尾を歩く僕は、気を抜いたら置いて行かれそうな気持ちで前の団員の背後を歩いている。

その灯が、何やらおもむろに止まった。両端にある鬱葱とした茂みの間を通り抜け、足を止めると松明を持ったステファンがこちらを向いて立っていた。

「アモル、大丈夫？」

「ああ、無事だよ」

ステファンの同志ということでも最後尾を請け負った僕は、誰も欠けないように後ろから団員達の安全を確かめることになっていた。といっても、他の団員達の方が僕より体格が良くて強そうに見えるんだけど。

「了解、皆無事のようにですね。では行きましょう」

手早く状況確認を終えたステファンは、川の上流に一步踏み出す。「ちょ、ちよつと待ってくれ！」

そこに、団員の一人が声を上げた。

ステファンは後ろに向き直って、

「どうかしましたか？」

「ああ、」

怒り肩をした角張った髪型の団員は声を荒げて言う。

「こいつの様子がちよつとおかしいみたいなんだ」

団員の視線の先に目を向けると、そこには俯いて見るからに具合が悪そうな細長い団員が居た。

「さっきからどうもふらふらしてると思って、おかしいと思ってたんだよ。それで気になってよお、声をかけてみても、全然返事が返ってこないんだよ」

説明している矢先、ぐつたりと細長の身体が折れて地面に崩れ落ちる。さつと反射的に話していた団員が両手で支え、なんとか地面への直撃は避けられたが、腕の中の団員は「うっ、うっ」と呻き声を漏らしている。

「おい、大丈夫かあ！？ しつかりしろ！」

問いかけてみるが、反応が弱く、か細い声が聞こえてきているだけだ。

ステファンは真っ直ぐに駆け寄り、片膝を地面につけてその声に耳を傾ける。

口を必死に動かして、近くに来たステファンに対し微かだが、何か伝えようとしているみたいだ。

ステファンは真剣な表情でその声を明確に捉える。

「置いて……て……行け……」

「はあ！？ 何言ってるんだよ！？」

しかし、反応したのは倒れた団員を両手に抱えている男だった。

「おまえそれでも騎士団のメンバーか！？ こんなことでへこたれてんじゃねえよ」

男の怒声が響く中、か細い呻き声が応える。

「身体が言うことを聞かないんだ」

男がさらに叩き起こそうとしているところをステファンは片手で制して、静かに言う。

「ここで揉めていても仕方ありません。動けないのなら、僕が担いで運びます。だから先頭は代わりにあなたが行って下さい」

ステファンは男に松明と地図を差し出す。

男は目の前に出されたそれを見て、ぐつと息を詰め、あきらめたように口に出した。

「言い出したのは俺だ。だからこいつは俺が運ぶ。あんたは、班長に直接手渡されたんだ。だから先頭はあんたが行きな」

団員を引っ張って立ち上がらせながら、

「それにあんたの身体じゃ、こいつは持っていけねえよ」

背に抱えられた団員は、涙ながらに己の行いを恥じる。

「すまん……、この……借りは必ず……返す……」

「わかったからもう喋るんじゃねえ、黙って体力を温存している……グツ……」

男は安定した姿勢で前を向き、周りの団員達に言いかける。

「みんな待たせてしまって悪かったなあ」

返答はなかったが、無言で肯定の念が送られているのが伝わった。団員達は一列になり、背中に仲間を担いだ男は僕の前に並んだ。

「出発します」

先頭のステファンが声を張り、隊列は上流に向かって進み出した。

流水が岩盤に叩きつけられる音が木魂している。

滝の前で立ち尽くしている団員達の中に暗雲が立ち込めている。僕達は滝に辿り着くことができたのだが。

異変が起きたのは今よりほんの5分前のこと。ちょうど滝の流水音が耳に届いて来たあたり。

僕は目の前に担がれた団員の背中を心配しながら進行していた。

先ほどの騒ぎから立ち直り、隊列は安定していた、はずだった。

突如としてその足が止まるまでは。

不審に思った僕は前方のステファンに目をやった。すると、今まで夜の中を明るく灯していた松明の火が消えかけていた。今にも消えそうなくらいに弱く燃えていて、見ている内にそつとその火は勢いを失くした。途端に暗くなる視界に団員達は、それぞれ身じろぎをして動揺していた。振り返り、その様子を見たステファンは、団員達の不安を拭い去るように説得し始めた。

「皆さん大丈夫です。この川沿いを進めば滝に着きます」

『そんなこと言ったらって灯がねえと、危ねえよ』

中程にいる団員の一人が野暮ったく不平を言った。

「昼間行つた道順通り行けば、安全なはずです。まだここに来た感覚が残っていますので、行けます」

『それでもし迷ってしまったらどうすんだよ。適当な感なんか信じられるかあ』

前向きなステファンを足止めするように非難が飛ぶ。これではこのまま動けず仕舞いになってしまいそういだ。

誰もが、落胆してしまいそうになった時、僕の前の図体の大きい団員が言った。

「それでも行くっきゃないだろうがよ。このままここで止まったまま終わりになるか、先に進んで、迷うかもしれないがゴールを目指すか。俺は前に進むね。こんなところで終わってたまるかあ」

言い終え、男は立ち止まったままの団員をずいと追い越していく。その姿を目の当たりにした中程の団員は半ば投げ出したような態度

で、

『わかったよう、付いて行ってやるよ』

また前へ歩き出した。

ステファンは何も言わずにその人達に同調して再び前を向いた。

隊内は、あれから奇妙なほどに沈黙を保ち続けていた。滝から噴出される水蒸気に混じって、嫌な汗が身体を包んでいる。絶体絶命という訳はないのだが、無事に広場まで集まれるかどうか、誰しもが不安を抱き、刻々と過ぎる時間に焦りを覚えている。

滝の周辺には木々が密集しておらず、夜光が降り注ぎ森の中よりも明るく感じる。この鬱積した気持ちを晴らそうと夜空を見上げると、夜空一面に星が瞬いていた。幸運なことに今宵は満月で月光がいつもより強い。

ただこういう満月の日にはよく狼や獣が出没するって前にどこかの童話に書いてあったような、気がしていたら。

ウォーン！ ウォオウォーン！

ドキっとして慌てて辺りを見回す。木々の隙間、草の茂みに注視して警戒する。

団員達も皆、一様に同じ行動を取っていたようだった。胸の奥から心臓が突き上げてくるように鼓動して手にはべっとりと汗が滲んできた。

『なんだってんだ！？』

団員の一人が声を荒げて驚きを口に出した。

じりじりした後退り、土を擦る音がそこかしこから立てられ、動揺を表す。

『出たんじゃないのかあ』

『獣だ。獣。俺たちを襲いに来たんだ』

『くっそー、どこにいる！』

団員が口々に不安を口にして、さらに場の雰囲気混乱する。

僕も必死になつて、どこから襲ってくるかも分からない獣を恐れ、硬直していた。

「静かにしろ！」

びしつと声を張り上げたのは背中に団員を抱えた男だった。

「おまえら、ぴこぴこ怖気ついてるんじゃないやねえよ」

『んなこと言つてもよ』

『襲われたらどうすんだよ』

卑屈混じりの虚勢が弱弱しく発せられた。

構わずに男は続ける。

「もし獣が襲つてきたら正面から立ち向かえばいいんだよ」

『どんな化物かもわかんねえんだぞ』

「それでもやるんだよ!!!」

男は眉を吊り上げ、怒りながら言う。

「そんな縮こまつてたらどんな奴が来ても一緒だよ！俺たちはもう騎士団の一員なんだ。だからこんくらいの苦境で負ける訳にはいかないんだよ」。

最早誰も言い返してこず、団員達は押し黙って男の言うことに耳を貸していた。

「俺らは一人じゃない。人数がいる。だから、襲われてきても協力すればなんとかなるはずだ」

男はステファンの方を向いて、

「そつだろ」

ステファンは急に自分に話が振られたので、一瞬戸惑い、すぐに冷静になり、

「はい、彼の言うとおりです。皆で協力すれば勝機はあると思ひます」

「よし、そんじゃあ、この勇敢な騎士団に集う名を挙げていこう」
突然の展開に団員はちよつと困った風をしている。

「俺は、ロックス・ハード」

「私は、ステファン・セリオ」

『モツソ・レフト』

『ウエル・トレイ』

『ゲージ・ミドサム』

「僕は、アモル・ウイレンス」

「そいつは、ネルニクだ。俺と同じ部屋だ」

ウエルが言った。

「確か、苗字はジャス、なんとかだったような……」

ウエルは考えながらポケットの辺りに手をやって、はっと思い出した。

「そうだ、ジャステイツシュだ。本当正義感の強い奴で、初め言い合いになりそうに疲れてしまったんだよ」

「そうかあ」

頷いたロックスは、背中に担いだネルニクをもう一度担ぎ直した。

「それで、どうすんだよ。これから。ステファン」

ステファンは、しばし黙考してから口を開いた。

「帰りましょう。もと来た道を」

「だけど、どこで曲がれば良いんだよ。川沿いを下ることはできるが、灯がないんじゃない道に入ればいいのか分かんねえぞ」

「そつ、それは……」

言葉を詰まらせるステファン。沈黙が舞い戻り、また嫌な空気になるうとしていた。

「だい…じょう…ぶだ」

必死に小さな声を出しているのは、調子を崩しているネルニクだった。

「あそこには俺たちの足跡が付いているはずだ」

「そんなこと言ったって、灯がねえんじや、確かめられないだろうが」

ロックスが欠点を挙げる、ネルニクは続けて話す。

「川の…地形だ」

その言葉で僕は思い付いた。

「あの、落ち窪んでいるところですよね」

「そう…だ。あそこは……うっ……」

ゲホツ、ゲホツと途中でむせて、ネルニクは苦しそうにしている。「分かった。おまえはもう寝とけ」

ロックスは、まだ話し続けようとするネルニクを制止し、僕を見据えた。

「頼めるか？ アモル」

「はい、やってみます」

「ちよつと頼りねえなあ。みんなはどうなんだ？ 他に案があるやつは居ないかあ」

誰も何も言わず、無言で頷いている。

「よし、んじゃあ、ステファン。まとめるのはおまえの仕事だ」

「はい、では、帰りはアモルを先頭に行きます。次いで、ネルニクさんを担いでいるロックスさん、その後は適宜並んで下さい。最後に僕が後ろに付きますので」

言われた団員達は、指示通りにさつと一列に並んだ。

「行きましょう」

ステファンの号令を合図に、僕は先頭を歩き始めた。

夜が明けようとしている。

うつすらと白み始めた景色。朝靄が木々の間を縫うように幾重も伸びている。

朝の新鮮な空気を肺に吸い込み、爽快な気分になるはずだった。
「うむむ」

悩みながら顎に手を添えるヘリオ班長。その瞳には心配の色が浮かんでいる。

もうすぐ約束の日の出が訪れようとしているのに、未だにもう一方（洞窟に向かった方）の班は帰らぬまま、それといった兆候も現れずにいる。

フリード班長も気遣わしげに遠くに目をやって、帰りを待っている。ヘリオ班長と違い、ましてや自分の班の団員達が帰還していないのは、相当心配だろうと思う。その証拠に、明らかに顔には不安の色が出ている。流石のフリードさんもやっぱり居ても立っても居られないみたいで時間が経つに連れて焦りが募っている様子。

もう今からだいぶん前に、先に到着した僕達の班は皆、安堵していた。そしてもう一つの班の帰りを待つて祈っていた。同じ苦しい体験をした同志に友情にも似た感情を覚えて、早く帰って来て共に任務達成を喜び合おうと思っていた。

もうあとどのくらいだろうか。次第に明るんでいく森の中で、刻一刻と時間は進んでいく。終了時間が差し迫っていき、今は彼らの無事が心配になっていた。昨夜、僕達が聞いた獣の遠吠えは、おそらく洞窟の方から発せられたんじゃないか、と今になって思う。

森の奥地にある滝から僕達は、ネルニクさんの助言をもとに川を下った。僅かな地形の変化も逃がさないように努めて、言っていた通り川の窪みを発見した。そして、あとは近くの道から森に入り、そのまま慎重に來た道に戻った。迷わないように状況の確認を何度も

行い、時間を費やしたため到着は遅れたが、ちゃんと辿り着くことができた。

そう。もうひとつの班もできれば自分達の班と同じであって欲しい。ただ迷わないように慎重になっていたから遅くなった、と。

そんな僕の同情にも似た希望は、突然の轟音と共に掻き消された。ドツ、ドツ、ドツ、ドーン。

連続して起こる地響きは森の中心の方から響いてきた。

咄嗟に皆はびくりとなって驚いた。

一体なにごとだ？　じりじりと土を踏みしめる音と身じろぎのために発した服の摩擦音があちこちから聞こえる。団員達は言葉に出していないが、そう囁いているように思えた。

この異常事態に一番驚いたのは、二人の班長だったかもしれない。声を上げて、

「おまえら、絶対ここを動くなよ」

フリード班長は、横に居るヘリオ班長を見る。

「皆の者、私達が帰って来るまでここで待機だ。本当はこの後にちよつとした森のルールを教えようと思ったが、それは中止とする。

日が中天に昇っても、もし私達が帰って来なかった場合、城に報告してくれたまえ。ステファンくん、君に一時このリーダーを一任しよう」

ステファンは目を見開いてヘリオ班長の方を向き、躊躇いながら、「はい」

「よろしく頼んだよ」

走って行く二人の団長の後ろ姿を見送った。

風のようなスピードで木々の隙間に入り込み、駆け抜けて行く団長達は間もなく見えなくなり、広場には静寂が舞い降りた。

予想外の出来事に皆は動けないでいる。もちろん彼らのために何かしたいと思っている。現状は、ただじっと信じて待つのみ。団員達は無言で心を決め、祈るように一度目を閉じて、願った。

どうか無事でいてくれよ。

「オラ オラ オラーツ！ 角ぶつ放すぞー！ オーツ！」
激怒し、先が錐体に尖った杭をぶんぶんと投げ放っている。巨大な馬。白に近い乳白色のなりが、朝霧と同化してカモフラージュになっている。

「とおりやー！」
ぐさ、ぐさ、ぐさ、と足元の土に深く突き刺さる杭。

獣の鳴き声にも似た人語を叫びながら、放たれる杭は団員達を圧倒する。

木の根で自然発生した洞窟の近くで繰り広げられる交戦。つい先ほど洞窟に追いやられたフリード班長が率いていた班は、軽い交戦に見舞われている。

帰りしな、木々の隙間を縫いながら歩行していた団員達は、闇夜に光る鋭い眼光を目撃した。その双眸から放たれる圧倒的な気配に戦慄し、追われるがままにここまで追いやられてしまった。

洞窟に押し戻され、崖つぶちに立った団員達は腹を決めて、その危うい物体に立ち向かうことを決意した。

そして、戦闘が始まった。

支給された短刀を手に、他の団員達が後ろから山型に追隨して直行した。勢いをつけてどんどんと接近し、露になった姿を前に団員達の足は止まった。呆然とその姿を見上げる。

頭に角を生やした白い馬。それも二本足で立ち、両手は左右に振り分けられている。その様はまるで人のようでもあり、動物でもある形容しがたい姿。この怪物のような生き物に当てはまる呼び名と言えは、

「獣だ」

団員の一人が心情を吐露した。

面を合わせてから硬直しきっている団員達。馬獣はそんな彼らに躊躇いなく攻撃した。

巨体の右手に長大な棒が、瞬時に現れ、団員達が目を見開いている中、それを横なぎに一気に振るった。

鎧の胴の上から、重い衝撃が渡り団員達は全員後ろに吹き飛ばされ、滑空。石ころのように転がり、やがて勢いを失くし停止した。うっ、うっ、と方々から呻き声上がる。

今何が起こったのか？ 一瞬前のことを思い返し、右手に巨大な杭を持つ馬獣を見て、思い至る。

吹き飛ばされた。それも結構な距離。目視で5メートル程。

目前にいた馬獣は今や、少し遠い距離いるよだが、その存在感が絶大でゆっくりと一歩ずつ近づいてくる凄さに鳥肌が立つ。

立ち上がって立ち向かおうとするが、及び腰になってしまっている。

馬獣は、どうやらご立腹の様子でこめかみに薄く筋が立っている。

怖い

その姿に団員達は戦々恐々して、足が凍りついたみたいにその場で固まっている。

そんな彼らのことなど、気にも留めず、馬獣はどんどん手元に杭を生成し、

「ウオー！」

怒声と共に杭を次々と投擲。

投げられた杭は、まるでバリケードのように団員達の行く手を阻んでいる。

戦うこともできず、逃げることもできない。絶体絶命の境地。

土煙舞う視界の中誰もが、もう駄目だ、と諦めかけていた。

降り注ぐ杭の雨が、ふっと途絶えた気がした。直後、さっ、さっ、さっ、と軽やか足音が近づいて来て、

「おーいっ」

横手から聞こえてきた聞き覚えのある響き。

団員達はその声が本当かどうか耳を疑ったが、反応せずに立ち尽くしている団員達を視認し、

「こつちだ！ おまえら！ はやくしろ！！」

空耳ではなかった。横に首を巡らすと、薄っすらと見通せた。

ふらふらと頼りない人だと思っていたが、団員達の目色は一変した。こちらに呼びかける勇猛な姿はフリード班長。昨日の訓練の時に打って変わってその顔は真剣そのもの。こんな苦境に立っているというのに、今はとても頼もしく思える。

「フリード班長！！」

団員の一人が声を上げた。

「何やってるんだ！ 急いでこつちに来い！」

場違いに少し感動に浸っている団長達を叩き起こすように、フリード班長は言い立てた。

まさかの救いの人の方へと、団員達は一斉に走り出す。気のせいなのか、さっきから杭の攻撃は止まっている。不思議に思い、土煙が収まりかけた辺りから、獣が居ると思われる方へ目をやった。そこには。

「フーンッ！」

気合と共に長大な杭を振り回す馬獣と、

「ぬっ！」

その攻撃を身を翻し、ひらりと躲す肉付きの良い男。もう一つの班のリーダーことフレツチャーさん。彼は圧倒的な馬獣の力に押されながらも果敢に戦っている。

双眸を血走らせ怒りを秘める馬獣は繰り返す横薙ぎを避けられ、次のモーションへと移行する。

瞳を僅かの間、閉じ、一瞬で諸手に携えていた長大な杭を消し去り、

「んっ」

念ずるように右手に神経を集中させると、何も無いはずの手の中にドリルのような真っ白の剣が生み出された。

ヘリオ班長はその様子に驚き、目を見開く。普通では有り得ぬ超常的な光景。今までは横なぎの杭を距離を取りつつ避けて、弓で反撃して牽制していたが、あのドリル型の剣はおそらくは対接近戦用。この弓では歯が立たないだろう。

「止むを得ん」

馬獣の遠く後方にいる団員達の方を一瞥し、彼らが茂みに身を隠していることを知る。取り敢えずの救出は成功したと見える。ならば、

「フリード！」

大声を上げ、一陣の中の優男に視線を向ける。

その声を待っていたかのようにフリード班長はヘリオ班長を見交わし、頷いて、腰提げから白い玉を取り出した。

その様子を確認したヘリオ班長も腰提げから同じように白い玉を取り出し、今にもこちらに襲いかかるうとしてしている馬獣を一瞥し、

「退散 ツー！」

大声を張り上げ、手に持っていた玉を馬獣に思いっきり投げつける。

フリード班長も連なるように投擲した。

玉は馬獣の方へ目掛け、豪速球で滑空する。

馬獣は、2方向から接近する玉の軌道を瞬時に読み取り、横からのを躲し、前方からのを剣で払った。

同時。

ボンツ、ボンツと玉が弾け、白煙が飛散。

馬獣の足元と前面は、一瞬にして霧のように白煙が立ち込めた。

馬獣は寸秒停止し、体勢を立て直そうと斜め後方に身を引き、さらに後方へと下がっていき、構え直し、敵の姿を捉えようと目を睨めさせた。

しかし、僅かながら一度見失った人間達の姿は、もうそこにはなかった。気を澄ませ、気配を探っても近くにはおらず、もう手に届かぬところに行ってしまう模様。

「クツ、オーツ……」

呻くように悔しがる馬獣は血が上る頭を冷静に戻し、踵を返して森の奥地へと素早く入っていった。

半分放心したみたい部屋の様子を見ている。外は明るいとこのに物凄く眠い。室内には、シャワーの音が微かに聞こえてきている。ベッドの縁に腰を下してから動くことができずにいる。身体が芯までだるくて、立ちあがろうとしても今は言うこときいてくれない。先にシャワーを浴びているのはステファンで、僕はこうやって少しでも身体を休めてシャワーのための体力を温存している。新入団員の訓練は終わったことには終わった。本当は喜ぶべきだろうと思うんだらうけど、最後に色々あってちょっと動転している。というか混乱している。それはきつと一緒に訓練を受けた人達にとっても同じことなんだろう。特に直接遭遇した人にとっては。

やっぱり忘れようとしても脳裏に刷り込んできてしまうあの光景。ヘリオ班長とフリード班長が森に駆け込んで、一時間もしない内に彼らは戻ってきた。皆、所々に傷を負って、軽傷の者は痛手を負った者に肩を貸していた。

服から滲みでる赤い染みに目が行って、僕は目を見開いた。一体何があったんだって。

すぐにも事情を知りたくて誰かに訊こうと思ったけれど、そういう空気じゃなかった。重々しくて深刻な雰囲気の中ではとても軽々しく口を開くものではないと、身体が理解していた。

妙に押し黙った静けさの中、迅速に応急処置は行われて、詳しい事情も打ち明けぬままフリード班長は団員達に指示を送った。少し落ち込んだような真面目な口調で。

そんなフリード班長の変化の前に、待機していた僕らは口を挟むこともできず応じた。

応急の手当てが終わった負傷者を背に抱えたり、二人して肩を貸したりして、僕らは広場を後にした。

疲労と困惑の混じった気持ちでずっと森の小道を歩いて、城へと

帰還した。

そしてつい先程、城に到着して医務室に運ばれたあの人は大丈夫なんだろうか。結構傷がひどい人も居たみたいだけど……。

「アモル、シャワー終わったよ」

「ああ、わかったよステファン」

って、それよりも今は自分の心配をするべきかなあ。もうふらふらだ。

傍らに用意していた着替えを手に取り、最後の力を振り絞ってなんとか立ち上がる。

少し休んだおかげで、立つことが出来た。微かな驚きは疲労感に上塗りされながら、僕は部屋に備え付けてあるシャワールームに向かった。

棒のような足を動かしながら、肩にタオルをかけたステファンとすれ違い、部屋に入って横側にあるシャワールームへと。

とにかくこの汗と微量の泥が染みついた身体を洗って、リフレッシュしよう。話はそれから。後でステファンに訊いてみることにしよう。きっとステファンも分からないと思うけど。多分、動物の直観が察するに、あれは

獣の仕業だろう。

蛇口を捻って、頭から湯を浴び、僕はこのさっぱりとしない気持ちも洗い流そうとした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6756w/>

Willenscraft ウィレンスクラフト

2011年10月17日04時01分発行